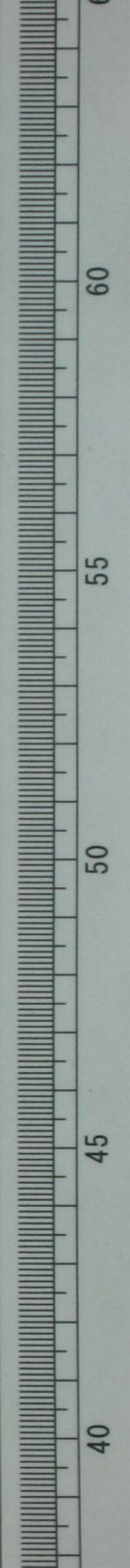
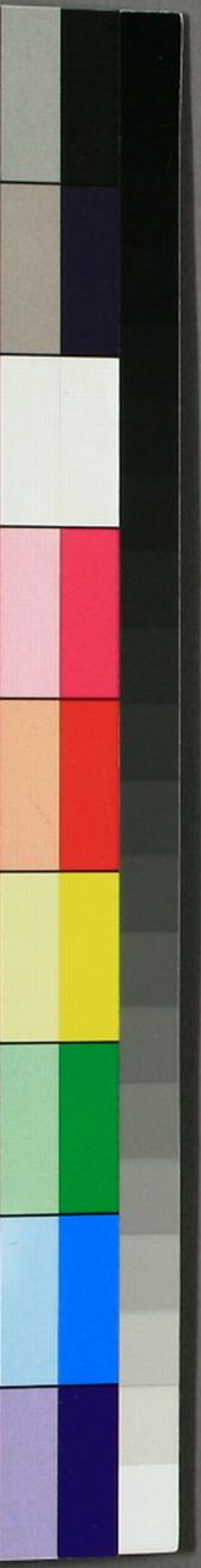


大玄經の哲學體系 完

特別
イ 4
3152
64



14
3152
64



95-121

揚子太玄論

目次

總論

(一) 漢代思想界，概況及揚雄，地位。
(二) 揚雄，生涯及著述。

本論

(一) 發端

第一章 『太玄』著作，由來體裁及註釋。
第二章 宇宙論，開展及『太玄』，規畫。

(二) 叙述

第三章、玄、本體的方面、(南方思想、是認)

第四章、玄、活動的方面、

(上) 宇宙現象、原理、(北方思想、是認)

(下) 宇宙現象、形式、(獨創的見解)

第一項、其體系、

第二項、其辨證、

(甲) 曆卜、關係、(時間的辨證)

(乙) 數卜、關係、(空間的辨證)

(三) 批判

揚子ノ太玄ヲ論ス



総論

(一) 漢代思想界ノ概況及揚雄ノ地位
炎漢ノ世前後合セテ四百有餘年正ニ是レ支
那民族ノ休養時代ナリ獨立思想缺亡ノ時代ナ
リ紅紫爛漫タリシ春秋ノ文華ハ已ニ褪盡シ戰
國英偉ノ生氣ハ全ク餒盡シ其痕跡ヲダニ留メ
ズナリ又請フ其變遷ニ就イテ略述セシ
蓋シ周末諸侯ノ力征ヤ種々複合セル原因アリ

リト雖モ人口ノ増殖ト生計ノ困難トハ其根本
的大原因ヲラズンバアラス、サレバ生存競争ノ
結果トシテ腕力ノ闘ハ延テ智力ノ争トナリ諸
子ノ説ハ此間ニ起リ唐虞三代ノ蘊蓄ハ轟然ト
シテ周末ニ爆發シ各自ノ地理的影響ト歴史的
感化トニ因テ種々ノ異思想ヲ形成シタリキ北
方ハ鄒魯南方ハ荆楚、コノ二域ニ湧出シタル
思潮ハ混々トシテ迸流シニ大系統トシテ對立
シ餘波ノ激盪スル所、百家ノ學トナレリ之ヲ要
スルニ先秦ハ支那四千年中最モ思想上ノ偉觀
ヲ呈シタル時代トイフモ敢テ過言ニ非ズ

然レ凡人間ノ潛勢力ハ自ラ一定ノ分量アリ
支那民族ガ三代ノ間ニ於テ蓄積シタル素養ト
準備トハ春秋戰國ノ兵燹ト筆論トニ消費シ傾
注シ盡シタリ人心ハ闘ニ倦ミ思想ハ争ニ疲レ
タリ其極、腦漿ノ乾涸シタル形跡ハ已ニ戰國ノ
末葉ニ於テ認知サルベク現世ヲ以テ苦痛ト感
シ休養安息ヲ以テ理想的快樂トナセル厭世的
傾向ハ當初ノ南方思想中ニ尋見スベキナリ而
シテ暴秦ノ一統ハ益々ノ勢ヲ助ケテ焚書坑儒

ノ慘禍ハ其終ヲナシタリキ
之ニ繼テ秦楚ノ攻戰アリ項劉ノ逐鹿アリ、カ
、ル爭擾紛亂ハ益人心ヲ抑壓シ萎縮セシムル
ノミ、ソノ愈倦ニ愈疲レタル極ハ宛ラ半死ノ人
ノ如ク昏迷シテ復タ起ツベカラズ思想界ノ事
固ヨリ言フベキ者アラズ漢初、挾書律ノ廢止ハ
ヤ、枯草ニ雨ヲ下シ轍魚ニ水ヲ與ヘシ如シト
雖モ只管休養安息ヲ渴望スル場合ナレバ僅ニ
蘇生シテ生命ヲ維キ得タルマデノ一ノ之遂ニ
活カシ鼓舞シテ舊時ノ盛觀ヲ再現スルニ至ラ

ズ文景ノ後、國家ノ組織秩序ノ完成確立シテ外
觀上、憂患ナキニ至リシ時ヤ、人心ハ全ク平穩沈
靜ニ歸シ爰ニ初メテ休養安息ヲ樂シムヲ得、物
質的饒富ノ中ニ肉體の快樂ヲ満タスニ及々夕
リ、カクシテ獨立思想ノ欠セラ来タシ更ニ降テ
迷信的傾向ヲ生シタリキ、故ヲ以テ漢代ヲ通シ
テ理想的生活ナク精神的產出ナシトイフモ絶
エテ不可ナキ也

西漢ノ間、必ズシモ學者ナキニ非ズ、但シ多ク
ハ訓詁ノ家ニ非ザレバ蒐說ノ家、焚餘ノ書ヲ聚

拾シ整理シ解説スルヲ以テ専務トナス其所爲
ヤ全ク機械的ナリ且ツヤ訓詁註疏ハ屋上ニ屋
ヲ架スル者當時ニ在リテハ必要タリシニ相違
ナキモ思想開展ノ上ニ於テハ秋毫價值ナシ他
ニハ稀レニ獨創的思想家アリ唯ダ二三流ノ者
タルニ過キザレバ論スルニ足ラズ

而シテ爰ニ當時ノ趨向ヲ考察スルニ南方荆
楚ノ思潮ハ人心内部ニ沈浸シ北方鄒魯ノ思潮
ハ社會外面ニ標擧セラレキ、ソノ南方思潮ノ勢
カヲ得タル主要ノ原因ハ歴史的關係ニ在リ彼

ノ暴秦ヲ倒シタルハ楚人ノ力、與テ大ナル者ア
リキ、カクテ漢初荆楚ノ思潮ハ復興シ又而カモ
之レガ山東神仙ノ説ト抱合シテ一種ノ宗教的
道教ヲ構成スルニ至リテハ最モ善ク迷信的傾
向ヲ有スル當時ノ人心ニ適合セリ概言スレバ
漢代ニ於テ真道家ノ所論、全ク、ソノ俗道家ノ爲
ニ誤用サレシト雖モ、ソノ外形ノ智識ハ一般ニ
廣布セラレ時ニ其真義ヲ解スル學者ヲモ出シ
タリ之ニ反シテ北方思潮ハ復興ハ政治上ノ方
略ヨリ出テ漢武が董仲舒ノ言ヲ容レ國民思想

ノ沈滯奮敗ニ終ルヲ顧ミズ唯ダ其統一ヲ目的
トシテ六經ヲ表章シタルニ弼リ少ク氏形式的
ニ人心ヲ繫縛シタリキ、カクシテ其初、戰國ノ末
ニ至リ、秦ニ入リテ將ニ會流セントセシ南北ノ
西思潮ハ、禹域九州ノ曠土ガ一大帝國トシテ統
一サレシ闔國ノ大勢ニ乘シ、頽瀾奔濤、漢代ニ漲
溢シ、近接混淆セントシテ、早クモ調和ノ傾向ヲ
現シ来リ、根本的ニ之ヲ融合スベキ大思想家ノ
出現ヲ囑望シタリキ

コノ傾向ヤ、文學的方面ニ於テハ早ク實現シ

タリキ而シテ哲學的方面ニ於テモ其痕跡ヲ見
ザルニ非ス唯ダ遲々タリシノミ揚子ノ『太玄』ノ
如キハ其唯一ノ好適例ナリ

巴ニ前ニモ述ベタル如ク漢代ニ於テハ理想
的生活ナク精神的産出ニ乏シ辭賦史傳ノ如キ
ハ猶ホ少カラスト雖モ哲學的思索ニ關スル者ハ
寥々トシテ晨星モ常ナラズ其ヤ、見ルベキハ
淮南子ト揚子ノ書トアルノミ但シ淮南子ノ著
作ハ時期猶ホ早クシテ武帝ガ儒教ヲ標擧セシ
前ニ在リ依ラ未ダ南北西思潮ノ調和ニ想到論

及セズ主トシテ南方ノ繼承ナリ故ニ漢代ノ思想傾向ヲ代表スル者ハ揚雄一人トイフモ不可ナク其學ノ研究評論ハ固ヨリ輕忽タルベカラズ而カモ其人性行閱歷ノ瑣事ヨリシテ古來或ハ頗ル誤解セラレ或ハ全ク注意サレズ其眞價ヲ没失シタルニ於テハ一層ノ必要ヲ見ルベシ是レ余ガ特ニ敢テ此篇ヲ草スル所以ナリ

(二) 揚雄ノ生涯及著述

今揚雄ノ學ヲ論スルニ先テ試ニ其生涯ノ大略ヲ一瞥セシカ

揚雄字ハ子雲蜀郡成都ノ人ナリ其系周ノ伯僑ヨリ出ツ支庶ヲ以テ初メテ采地ヲ晉ノ揚ニ食之因テ氏トス伯僑ハ周ノ何別タルカヲ知ラズ揚ハ河汾ノ間ノ地ナリ周ノ衰フルマ揚氏或ハ侯ト稱シ鄆シテ揚侯トイフ會マ晋ノ六卿權ヲ爭ヒ韓魏趙興リ范中行知伯弊ル是時ニ當リテ揚侯マタ難ニ偏リ遂ニ逃竄シテ楚ノ巫山ニ

至リ因テ家ス楚漢ノ興ル揚氏江上ニ溯リ巴ノ
江州ニ處ル而シテ揚李ナル者仕官シテ廬江太
守ニ至ル漢ノ元鼎年中仇ヲ避ケ復タ江上ニ溯
リ嶠山ノ陽ニ處リ世々農桑ヲ以テ業トナス李
ヨリ雄ニ至ル五世一子ニ傳フ故ニ雄ハ他揚ト
相失ヒ獨リ蜀ニ在リ

揚雄少ニシテ學ヲ好ミ章句訓詁ヲナサズシ
テ通ズ而カモ博覽見ザル所ナシ人ト爲リ簡易
佚蕩口吃ニシテ劇談スル能ハズ默シテ深湛ノ
思ヲ好ム清淨ニ爲者欲少ク富貴ニ汲々トラズ

貧賤ニ戚々トラズ廉隅ヲ修メテ名ヲ當世ニ徼
ムルヲナサズ家産十金ニ過キズ之シクシテ
儉石ノ儲ナクホ是如タリ自ラ大度アリテ聖
哲ノ書ニ非サレバ好マズ其意ニ非サレバ富貴
ト難モ事トセズトイフ

雄ガ前半生ハ隱逸的文士トシテノ生活ナリ
其好ム所ハ辭賦ニアリキ是ヨリ先キ蜀ニハ司
馬相如アリ其賦ヲ作ルヤ弘麗溫雅雄心ニ之ヲ
壯トシ賦ヲ作ル毎ニ帝ニ之ニ擬シ以テ式トナ
セリ又夕屈原ヲ吊フノ諸作アリ其意即チ謂フ

甯テ屈原ノ文相如ニ過ギ容レラレズ離騷ヲ作
リ自ラ江ニ投シテ死スルヲ怪ミ其文ヲ讀テ之
ヲ悲ミ流涕セザルイアラズ嗚呼君子時ヲ得レ
バ大ニ行ハレ時ヲ得サレバ龍モ蛇ナリ其遇ト
不遇ト共ニ命ナルノミト。迺テ書ヲ作り往々離
騷ノ文ヲ撫シテ之ヲ反シ嶠山ヨリ江流ニ投シ
以テ水底ノ冤鬼ヲ祭リタリ、コノ文、名ケテ反離
騷トイフ又夕離騷ニ旁テ皇第ヲ作り名ケテ廣
騷トイヒ惜誦ヨリ懷沙ニ至ル諸第ニ旁テ一卷
ヲ著ハシ名ケテ畔牢愁トイヒ又、

雄ハ久シク僻遠ノ故國ニ藝居シテ未ダ能ク
盛名ヲ天下ニナサズ其初メテ都ニ入り文彩人
主ヲ勤カシ因テ官爵ヲ得シハ初老以後ノ一ニ
シテ成帝ノ朝ニ在リ
年四十餘蜀ヨリ来テ京師ニ至ル客ニ揚雄ノ
文相如ニ似タリト謂フ者アリ大司馬車騎將軍
王音之ヲ奇トシ召シテ門下史トナシ雄ヲ薦ム
待ツ一歲餘帝方ニ甘泉泰畤陰后土ヲ郊祀シ
以テ繼嗣ヲ求ルルイアリ雄ヲ召シテ詔ヲ承明
殿ニ待タシム五月帝ニ甘泉ニ從ヒ還テ甘泉賦

ヲ作り之ヲ奏ス天子異トス其三月后土ヲ祭ル
トアリ帝迺々群臣ヲ帥ヒ大河ヲ横キリ汾陰ニ
漚^{ソウ}ノ祭畢リ介山ニ遊ヒ安邑ニ回リ龍門ヲ顧ミ
鹽池ヲ覽、歷觀ニ登リ西岳ニ陟テ八荒ヲ望ミ殷
周ノ墟ヲ迹チ眇然トシテ唐虞ノ風ヲ思フ雄以
爲ラク川ニ臨テ魚ヲ羨ム、歸テ罔ヲ結フニ如カ
ズト、還ルヤ河東賦ヲ上リ以テ勸ム、其十二月羽
獵ノトアリ聊カ獵ヲ校スルニ罔テ賦シ以テ風
シ乃々羽獵賦アリ明年帝胡人ニ誇ルニ禽獸多
キヲ以テセントシ秋、右扶風ニ命シ民ヲ發シテ

南山ニ入り西ハ褒斜ヨリ東ハ弘農ニ至リ南ハ
漢中ヲ毆リ羅罔罾罟ヲ張り熊羆豪猪虎豹狐獾
狐兔麋鹿ヲ捕ヘ載スルニ檻車ヲ以テシ長楊射
熊館ニ輸シ罔ヲ以テ周陸トナシ禽獸ヲ其中ニ
縱テ胡人ヲシテ之ヲ手搏シ自ラ其獲ヲ取シメ
帝親ラ臨觀セシトアリ是時農民收斂ヲ得ズ雄
從テ射熊館ニ至リ遂テ長楊賦ヲ上リ又聊カ筆
墨ニ因テ文章ヲ成サントシ故ラニ翰林ヲ藉テ
主人トナシ子墨ヲ客卿トナシ以テ風ス雄遂ニ
除シテ即給事黃門トナリ又時ニ王莽劉歆ト並

ビ又喜テ董賢ト官ヲ同ウセシトアリ

哀帝、時、董賢事ヲ用ヒ權人主ヲ傾ケ薦ムル所、拔擢セザルナク諸ノ之ニ附離スル者、或ハ家ヲ移シテニ千石ニ至ル而シテ雄官ヲ從サズ時ニ方ニ「太玄」ヲ草ス自ラ守ルト泊如タリ或ハ雄ヲ嘲ルニ玄ノ尚ホ白キヲ以テスル者アリ文ヲ作ラ之ヲ解シ號シテ解嘲トイフ解嘲ハ蓋シ東方朔ノ答賓難ニ擬セシナリ之ヲ讀メバ其功名ヲ以テ意トナサズ清標自ラ高クシ著述ヲ以テ不朽ニ傳ヘントスル志アルヲ見ルベク又夕漸

ク誇張浮華ナル技エヲ罷メテ深遠幽眇ナル思索ニ入リシヲ知ルベシ之ニ次テ「法言」ノ作アリ王莽ガ帝位ヲ篡スルヤ談說ノ士符命ヲ用ヒ功德ヲ稱シ封爵ヲ得ルモノ甚ダ衆シ雄辯ニ附隨シタリシモ遂ニ侯タラズ僅ニ耆老ノ次ヲ以テ轉シテ大夫トナリ爲ニ劇秦美新ノ文ヲ作り又嗟乎彼レ其頭上ノ白髮ニ愧テザルカ憐ムベシ爰ニ一個ノ御用幫間的文人トナリ了リ半生ノ清名ヲ擧ケテ泥土ノ中ニ棄テ去レリ夫レ漢代ノ學者ハ概シテ經術ヲ以テ奇利ヲ釣リ頗ル

氣節ナシ雄ノ前後ニ張島孔光馬融ノ輩アリ皆
然ラザルナク雄ハ亂臣篡國ノ時ニ際シテ爲ニ
後世ノ誦ヲ受クルト最モ甚シキナリ、私ニ思フ
ニ彼ハ固ヨリ狡猾奸佞ノ賊ニ非ズ唯ダ學者ニ
有リ勝々ナル善儒因循ノ人ニシテ爲ニ覺エズ
大節ヲ誤ルニ至リシノミ次ノ事實ハ明カニ之
ヲ證スル者ナリ

莽ノ帝位ヲ篡スルヤ劉歆甄豐皆上公トナル
莽既ニ符命ヲ以テ自立シタリモ即位ノ後、其原
ヲ絶ク以テ前事ヲ神ニセント欲ス而シテ豐ノ

子尋歆ノ子棻復々之ヲ歆ス莽豐父子ヲ誅シ棻
ヲ四裔ニ投ズ辭ノ連及スル所便々收メテ請ハ
ズ時ニ雄書ヲ天祿閣上ニ投ス治獄事ノ使者来
リ雄ヲ收メントス雄自ラ免レザルヲ恐レ逼々
閣上ヨリ自ラ投下シ幾ンド死セリ莽之ヲ聞テ
曰ク雄素ヨリ事ニ與ラズ何故ニ此間ニ在ルト
因テ其故ヲ尋ヌ初メ劉棻雄ニ從テ奇字ヲ作ル
ヲ學ビシヲアリ故ニ連坐シテ此ニ至リシナリ
而シテ雄實ニ情ヲ知ラズ詔アリ問フナカラ
シハ然レモ京師之ガ爲ニ語テ曰ク惟寂寞自投

関、爰清浄作符命ト雄病ヲ免シ後復々召シテ大
夫トナル天鳳五年ニ卒ス年七十一

雄が家素ヨリ貪ナリ酒ヲ嗜ム人其門ニ至ル
一稀ナリ時ニ好事ノ者アリ酒ヲ載ヤ從テ游學
ス弟子ニ鉅鹿、侯芭アリ常ニ雄ニ從テ居リ其
太玄法言ヲ受ク雄ノ卒スルヤ爲ニ墳ヲ起シ之
ヲ表スル三年トイフ他ニ其徒ノ名ヲ傳ヘズ

雄ノ死スルヤ大司空王邑、桓譚ニ謂テ曰ク予
帝ニ揚雄ノ書ヲ稱ス豈ニ能ク後世ニ傳ヘンヤ
譚曰ク必ズ傳ヘン顧ルニ君ト譚ト見ルニ及バ

ザルナリト然リ雄ノ著作ハ現ニ三ヲ後代ニ傳
ヘタリ

劇秦美新ノ文ヲ作テ莽ヲ頌シタルヲ以テ天
下後世之ヲ醜ナリトスルモ雄ナル者ハ漢代第
一ノ思想家ニシテ又タ實ニ南北西思潮ノ會流
ニ棹シテ樞要ナル地位ヲ占ムル者ナリ其著述
ニ意ヲ用ヒシ者ハ天性學ヲ好ミシニ因ルト雖
モ仕官シテ榮達ニ至ラザリシ一事ハ又タ其副
次的原因タルベシヨシヤ後世ノ批議ハアリト
モ文學上ノ述作ニ名ヲナシ更ニ哲理上ノ思索

ニ移リシ彼レハ自ラ氣局ノ大ナル所アリ漢代
ニ於テ比傳ナシトイフモ不可ナカラシ雄ノ著
作ヲ經括スレバ下ノ如ク謂フヲ得ベシ以爲ラ
ク經ハ易ヨリ大ナルハナシト故ニ「太玄」ヲ作り
又傳ハ論語ヨリ大ナルハナシト故ニ「法言」ヲ作
リ又史篇ハ倉頡ヨリ善キハナシト故ニ「訓纂」ヲ
作り又箴ハ虞箴ヨリ善キハナシト故ニ州箴ヲ
作り又賦ハ離騷ヨリ深キハナシト反シテ之ヲ
廣メ又辭ハ相如ヨリ麗ナルハナシト因テ四賦
ヲ作り又皆其序ヲ斟酌シ相與ニ放依シテ馳聘

シ心ヲ内ニ守リテ外ニ求メズ時人皆之ヲ習ス
唯ダ劉歆范滂之ヲ敬シ桓譚ハ以テ絶倫トナセ
シト傳ス彼ハ當時ニ於テ多クノ知己ヲ見ズ又
夕後代ニ於テモ其真價ヲ誤ラレタル不幸ノ思
想家ナリ

雄ノ文章學術ヲ極作スル者ハ曰ク彼ハ模擬
ヲ以テ身後ノ名ヲナサントセシ者、模擬ハ直ニ
其素志ニ出テタレバナリト其レ然リ、豈夫レ然
ラシヤ今ソノ文章ヲ觀ルニ實際模擬ニ出テタ
リト雖モ善ク他ノ長所ヲ集メテ大成シ蒼勁ニ

シテ宏潤ナル風趣あり文飾ニ富ミテ却テ正大
雅頌ノ義ヲ失フノ嫌ハナキニ非ザレバ其奇字
ヲ用ヒテ奥衍ノ體ヲナスト、文中ニ佳句ノ摘ム
ベキ者多キトハ確ニ其文ノ特質ナリ薛敬軒ノ
之ヲ評シテ

思索深至學問精博故往々有妙處止可零碎取
之無大段妙處

トイヘルハ先ツ妥當トイフベク蘇東坡ノ
以艱深之詞文淺易之說

トイヘルハ時ニ其病ニ中ルト雖モ一般ニ推及

シ難ク篤論ニ非サルナリ又夕其學問ニ關シテ
ハ一方ヨリ論旨時ニ正大ナルモ儒家ノ範圍ヲ
脱セズトイハレ、他方ヨリハ老莊ノ臭味ヲ和ス
ルヲ以テ却ケラル、要スルニ調和ハ其學問ノ序
領ニシテ獨創ノ見解皆無トイフニ非ズ之ヲ當
時ノ諸儒ニ見ルニ蕪然傑出スル所アリ司馬光
嘗テ言アリ揚子雲ハ真ニ大儒ナリ孔子歿後聖
人ノ道ヲ知ル者ハ雄ニ非ズシテ誰ゾト蓋シ司
馬光ハ嗜痂ノ癖カ痛ク子雲ヲ尊重シ其著ニ註
シ兼子テ『太玄』ニ擬シテ潜虛ヲ作ラントセシ者

真ニ子雲後ノ子雲タルノ觀アリ其言フ所已レ
ノ所好ニ阿キルノ嫌ナキニ非ザルモ全ク謬レ
リトハイフベカラズ韓愈ガ之ヲ荀卿ト並稱シ
大醇ニシテ小疵トイヘルハ語ニ分寸アリ中ラ
ズト雖モ遠カラズ後世蜂蟻ノ如キ群小儒カ口
ヲ極メテ其人物論ヨリ延イテ學術文章ヲ課作
スルハ却テ偏見トイフベク以テ子雲ノ價值ヲ
没スルニ足ラザルナリ班固ノ如キハ雄ノ時ヲ
去ルテ遠カラズ加フルニ史家ノ慧敏ナル眼光
ヲ以テ當時ノ諸儒ガ雄聖人ニ非ズシテ經ヲ作
ルハ猶ホ春秋吳楚ノ君ガ僭號王ヲ稱スルガ如
ク蓋シ誅絶ノ罪ナリト謂ヘルニ對シ辯護的口
吻ヲ以テ雄ヲ評シテ曰ク
凡人賤近而貴遠揚子雲祿位容貌不勤能人故
輕其書昔老聃著虛無之言西篇薄仁義非禮學
然後世好之者尚以爲過於五經自漢文景之君
及司馬遷皆有是言今揚子之書文義至深而論
不詭於聖人若使遭遇時君更聞賢知爲所稱善
則必度越諸子矣

ト、

彼ハ多方面ノ人也而シテ文學的方面ヨリモ
哲學的方面ヲ以テ重ヲナス、哲學的方面ハ之ヲ
太玄ト法言トニ徴スベク、就中前者ハ理論的方
面ニ關シテ宇宙現象ヲ論シ、後者ハ實際的方面
ニ屬シテ道德政治ヲ論ズ、若シ夫レ文學的方面
ニ至リテハ一部ノ揚侍郎集ヲ以テ述レリト爲
スベシ

余ハ揚子ノ全體ヲ論シ之ヲ批判スルニ意アリ然レトモ今ハ其哲學ノ理論的方面ヲ限リ一部ノ太玄經ヲ取リ其根本主義ヲ尋繹セントスル也

本論

一、發端

第一章、太玄著作ノ由来體裁及註釋

太玄ハ揚雄ノ哲學ノ理論的方面トシテ流石
 二意ヲ致シタル者ト見エタリ其之ヲ作ルヤ人
 嘲テ玄ノ尚ホ白キヲ以テシ雄ガ解嘲ヲ作テ之
 ヲ辨セシト已ニ前ニ述ベタリ蓋シ彼ノ説ニヨ
 ルニ

賦者將以風也必推類而言極麗靡之辭閱侈鉅

衍競於使人不能加也既迺歸之於正然覽者已
 過矣往時武帝好神仙相如上大人賦欲以風帝
 反飄飄有陵雲之志繇是言之賦勸而不止明矣
 又頗似俳優淳于髡優孟之徒非法度所存賢人
 君子詩賦之正也 (漢書揚雄傳)

ト乃々賦ヲ廢シテ太玄ヲ作リタルナリ而シテ
 更ニ

或問吾子少而好賦曰然童子彫蟲篆刻俄而曰
 壯夫不爲也 (法言吾子篇)

ノ言ト並觀スルハ余ガ前ニ述ベタル所當時ノ

浮華ナル辭賦ヲ以テ真正ノ學者ノ事ニ非ズト
ナシ。因テ更ニ宏遠深邃ノ思索ニ入リシトイフ
トノ真ナルヲ知ルベシ其之ヲ作リシ時ハ董賢
カ事ヲ用ヒシ哀帝ノ朝ニ在リ雄ガ年已ニ知命
ヲ過キ世故ヲ閱歴シ思想ノ確定セシ際ニアリ
書已ニ成ル之ヲ觀ル者知リ難ク之ヲ學ブ者成
リ難シト稱セラル客ニ「玄太ダ深ク衆人ノ好マ
ガルヲ難スル者アリ雄文ヲ作テ之ヲ解シ號シ
テ解難トイフ其中ニ左ノ言アリ

蓋胥靡爲宰寂寞爲尸大味必淡大音必希大語
叫叫大道低回是以聲之眇者不同於衆人之耳
形之美者不可棍世俗之目辭之衍者不可齊於
庸人之聽今夫弦者高張急徵追趨逐者則坐
者不期而附矣試爲之施咸池掄六莖發蕭韶詠
九成則莫有和也是故鍾期死百牙絕弦破琴而
不肯衆鼓獲人亡則匠石斲斤不敢妄斲師曠之
調鐘竝知音者之在後也孔子作春秋幾君子之
前睹也老子有遺言貴知我者希此非其操與
劉歆嘗テ「太玄ヲ觀テ曰ク空シク自ラ苦シム今
ノ學者ハ祿利アリ然レ氏尚ホ易ヲ明カニスル

能ハズ又タ『玄』ヲ如何、吾恐ラノハ後人ノ用ヒテ
將瓢ヲ覆サンコトヲト、雄笑テ應ヘズ又タ嘗テ
曰ク後世必ず揚子雲アリテ之ヲ知ラント、彼ハ
蓋シ知己ノ千古ニ期セシ者、其所論ノ價值ハ今
姑ラク之ヲ措キ其志操ノ確固ニシテ自信ニ富
メルハ頗ル嘆稱スベキナリ

然レトモ班固ノ謂フ所、雄ノ歿スルヨリ今ニ
至ル四十餘年、其『法言』行ハレテ『玄』遂ニ顯ハレズ
トイフヲ見、又タ後世之ヲ闡明スル者ナク却テ
誤解サレシヲ聞カバ、コノ書ノ長ク茫昧ニ没シ

タリシ一事ハ辨ヲ俟タズシテ明ナリ余ハ其理
由トシテ左ノ二件ヲ認ム

(一) 雄ノ人物操行ノ批難ノ延イテ其著書ニ及
ビタル事、一一般的理因、

(二) 『太玄』ノ所論法言ニ比スルニ頗ル幽奧精微
而カモ言辭ハ賦ニ比シテ更ニ詰屈艱深ナ
ル事、
一特殊的理因、

太玄ハ卷數十一之ヲ二大部ニ分ツベク前六
卷ハ周易ニ倣フテ作りシ玄ノ八十一家ヲ排序
シ、後五卷ハ八篇ヨリ成リ如上體系ノ原則ヲ闡

明シタリ故ニ體裁上ヨリイフトキ、前者ハ主部
ニシテ後者ハ附屬ニ過キサルノ者アレトモ研
究上ヨリイフトキ、後者ハ却テ重要部分ニシテ
前者殆ンド用ナキナリ

今ソノ體裁ヲ細覽スルニ前部ノ八十一家、各
家ノ総說アリ玄首トイフ、各家ノ中、分テ九ト十
シ初一初二ヨリ上九ニ至ル之ヲ九贊トイヒ又
夕附スルニ短簡深奥ナル辭句ヲ以テ又以上ハ
周易中各卦各爻ノ係辭ニ相當スルナリ、各贊又
夕測ヲ附ス是ハ周易ノ象ニ相當スル者故ニ玄

首ハ直ニ象ニ相當ストモ謂ヒ得ベシ玄首玄測
各都序アリ之ヲ篇首ニ置久四庫全書提要ノ說
ニヨレバ、亦ハ玄首一篇玄測一篇トシテ兩者其
類ニ從テ一處ニ滙合シ太玄後部ノ八篇ト合セ
テ全經一部十卷タリシガ晋ノ范望註ヲ作ルト
キ分析シテ其舊ヲ變シ今ニ至テ之ニ仍ルトイ
ヘリ、

更ニ後部五卷ヲ見ルニ班固ノ所謂秦曼德ニ
シテ知ルベカラザル爲ニ論述セシ者ニシテ玄
衡第七八序卦ニ準シ八十一家ノ次序ヲ論シ玄

錯第八の雜卦ニ準シ其義ノ錯綜同異ヲ辨シ玄
攤第九、玄瑩第十、及ヒ玄規第十三、玄圖第十四、玄
告第十五ハ全體ノ基礎ヲ論定スル者ニシテ繫
辭上下兩傳ニ相當シ、說卦ニ相當スル玄數第十
一及ヒ文言ニ相當スル玄文第十二ト合セテ細
心ノ攷察研究ヲ要スベキ部分ナリ『太玄』内部ノ
主義精神規畫ハ兔ニ角體裁ハ前ノ如クニシテ
全ク周易ノ面貌ヲ踏襲シタル者ナルヲ知ルベ
ク、是レ其易ニ擬セシトイフ所以、而カモ其外觀
上ノ一ツタルニ留意スベキナリ

屢イヘル如ク『太玄』ノ宗旨ヲ領會スル者頗ル
少ク、雄ト同時ニ劉歆ノ輩アリ、後世々々司馬光
アルノミ然レハ范望ノ記スル所ヲ見レバ、魏晉
ノ間、多少之ヲ研覈セシ者アリシニ似タリ、
揚子雲、虞、前漢之末、值王莽用事、身繫亂世、進退
無由、是以朝隱、官爵不從、昔者文王屈抑而繫易、
仲尼當衰周而述春秋、爲一代之法、以彰聖人之
符、子雲志不申、顯於是、章思耦易著玄、其道以陰
陽爲本、比於庖犧氏之作事、異而道同、福順禍逆
無有主名、桓譚謂之絕倫、張衡以擬五經、非諸子

之疇也自侯芭受業之後希有相傳受者乃到建
 安中故五叢主事章陵宋衷鬱林太守吳郡陸績
 各以淵通之才窮核道真為解釋足以根其秘奧
 無遺滯者

余ハ此書ヲ研宥セントシテ古今ノ註解ヲ求メ
 タリ明ノ進法ノ經籍志ヲ檢スルニ左記ノ書ヲ
 擧ゲタルヲ見ル

范望 太玄經解
 宋惟幹 太玄解
 徐庸 太玄解 十卷

章詒 太玄經注 十四卷
 左 太玄經 三十卷
 郭元泰 太玄洲旨 一卷
 司馬光 太玄集註 十卷
 太玄釋文 一卷
 許翰 太玄音釋 四卷
 左 太玄歷 一卷
 陳漸 演玄 一卷
 晁迥 易元星紀圖 一卷

胡次和

太元集注

十三卷

張行成

翼 玄

十二卷

四庫全書提要ニハ范望司馬光ニ家ノ外ニ左ノ
一ヲ擧ケタリ

葉子奇

太玄本旨

九卷

其教以テ尠少トナスベカラズ唯タ其存存ヲ知
ラズ目ノアタリ之ヲ觀ルヲ得サレバ其價值如
何ヲ知り難シ而カモ其多數ガ著名ノ學者ニ非
サルヲ見レバ好奇ノ士ノ緒餘ニ成リタル不完
全ノ者タルナカラシヤリ疑ハシム余が見ルヲ

得タルハ司馬光集注ノ外揚起元ノ注アルノミ
而者其ノ精細完整トナシ難キモ略ボ文義ヲ知
ルベシ而シテ余ハ必ズシモ之ニ馮據セズ全体
ニ於テ撞着ヲ生セサル限り自家獨特ノ新見ヲ
以テ之ヲ解釋シ大旨ニ通曉シタルヲ信ス

第二章 宇宙論ノ開展及太玄ノ規畫

余ハコトニ評論批判ノ支離滅裂ニ終ラシ
ヲ恐レ先ツ余が得タル結論ヲ冒頭ニ提起シ是
レヨリ漸々降下スル方針ヲ取ラントス其結論
ハ次ノ如シ「太玄ノ根本主義ハ南方老莊ニ子
ノ宇宙本體論ト北方周孔ニ聖ノ現象原理論ト
ノ調和ニ在リ而シテ其獨創ニ係ルハ十一家ハ
宇宙間ニ生滅循環スル個々ノ現象ニ共通ナル
階段的發達ノ形式ヲ説明スルニアリ
サレバ太玄ハ既ニ是レ一部ノ宇宙論ニシテ

南方西思潮ノ調和ヨリ出ワ故ニ先秦時代ニ於
ケル宇宙論ノ開展發達ヲ一瞥スルハ誠ニ必要
ノトニシテ蛇足ヲ加フル者トナスベカラザル
ナリ全體ノ支那哲學史ヲ草スル場合ハ兔ニ角
余が此篇ニ於テハ終ニコノ一章ヲ缺クベカラ
ザルナリ
神怪ノ事實ヲ以テ附加サレタル河圖洛書ノ
傳統トシテ夏ニハ連山殷ニハ歸藏遂ニ周ニイ
タリテ完成セシ一部ノ易經ハ實ニ支那最古ノ
哲學組織ナリ蓋シ支那古代ニ於ケル天地開闢

説ノ存在ハ余ガ私カニ確信スル所、易ハ其變化
シタル遺形ト見ルヲ得シカ其伏羲ノ八卦ヲ配
合シテ劃成シタル文王ノ六十四卦ノ根本的精
神ハ、太極ヨリ二氣ノ分出ヲ説キニ氣ヨリ四象
ノ分出ヲ説キ更ニ之ヲ擴充シテ宇宙間ノ萬種
現象ヲ説明セントスルニ在リ更ニ細説スレバ
太極ヨリ天地割判シ乾坤ヨリ男女成リ日月以
テ推移シ四時以テ代謝シ生死以テ代リ榮枯以
テ繼クニ至ル自然人間兩界ノ現象ハ千態萬狀
各自ラ相異ル如シト雖モ要スルニ皆是同一陰

陽兩氣ガ時處位ノ關係ニ對應シテ其形ヲ變シ
タルモノトナスナリ、孔子ハ宇宙間ノ諸現象ヲ
觀察シ類別シテ三トシ以テ天地人ノ三道ヲ立
テタリキ曰ク

立天之道曰陰與陽立地之道曰柔與剛立人之
道曰仁與義兼三才而兩之一説卦

陰陽トイヒ剛柔トイヒ仁義トイヒ三才ノ道其
名稱ヲ異ニスレ凡均シク是レ宇宙間ニ物消長
ノ二元素ニ外ナラズ、コノ者ハ無始ヨリ無終ニ
亘リテ宇宙間ノ萬種現象ヲ起シ然カモ一定ノ

規率ニ從テ循環反覆スル變化ノ大法則ニ攝セ
ラル、者トナセリ

知變化之道者其知神之所爲乎

一陰一陽謂之道

生生之謂道

(繫辭傳)

知ルベシ孔子ノ所謂道ハ廣ク現象界ノ事物ヲ
觀察シテ得タル宇宙間變化ノ法則ニシテ類推
法ニヨリ之ヲ人事上ニモ應用シタル者ナルヲ
以上ハ周易ノ要旨ナリ然レトモ爰ニ注意スベ
キ一事アリ易ノ原理トシテ其太極ヨリノ分出

ヲ説ク決シテ物質ノ分出ニ非タルガ如シ、エノ
邊ノ觀念頗ル明晰ヲ缺クト雖モ全體ノ傾向ヨ
リ推究スレバ根本的基礎タル彼ノ陰陽両氣ナ
ル者ハ決シテ物質ニ非ズ實ニ一種ノ力ナルガ
如シ想フニ易ハモト天地開闢説ニ本ツク者ナ
レバ當初幼稚ノ思想ヲ以テシテ物質モ直ニ太
極ヨリ分出セシ者ナリトノ考察モアリシナラ
ン但シ周人ノ稍發達シテ又々殊ニ實際ニ傾キ
タル思想ヲ以テ解釋セシニ至テ物質ノ分出及
ヒ發達ノ方面ハ自然棄棄セラレ希臘古代哲學

ノ論點タリシ世界問題 (Metaphy - Nouraus, Weltform -
Nourius, Weltprozess - Wie) / 如キハ支那ニ於テ正當
ナル秩序的の研究ナク發點ニ於テ已ニ偏崎シタ
リガクシテカ、働クベキ法則ノ方面ノ研究ノ
之曰ニ進ミ孔子ニ至リテゴノ傾向彰著トナリ
今ハカ其者ヨリカノ働クベキ法則即チ道ヲ發
揮スル一ニノ之其精神ヲ用ヒ易ハ全ク現象變
化 (天人行動上)ニ説示スル者トナリ了レリ

南方哲學ノ始祖タル老子ノ説ハ又タ均シク
天地開闢説ニ出テタル如シ然レモ是ハ宇宙本
体ノ考察ニシテ現象變化法則ノ探究ニ非ズ故
ニ易トノ契合類似ハ不明瞭ナリ其所謂道ナル
者ハ相對的ナラズシテ絕對的ナリ全宇宙ヲ包
括シタル總名ナリ故ニ明カニニ方面ヲ區別ス
ベシ其第一ハ宇宙ノ本体ヲイフ者ニシテ事物
現象ノ基礎トシテ永劫不變、神靈的存在ヲ有シ
無形無質遂ニ感知スル能ハズ道德經中、道ノ神
靈的ナルヲ贊美セシ者多シ今其一ヲ擧グレバ
有物混成先天地生寂兮寥兮獨立而不改周行
而不殆可以爲天下母吾不知其名字之曰道

(第二十五章)

其第二ハ道ノ生物特ニ人類ニ附與個立シタル者ニシテ其認存在在ハ復歸主義ノ根柢トナルベキナリ是ニ於テ天道人道ノ名目アリ(第七章)以上道ノ宇宙本体ニシテ天人ニ存スルヲ認識セリ而シテ現象ノ起源ニ就テハ依然分出ヲ説キタリ

道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰而抱陽、沖氣以為和 (第四十二章)

然レトモ是レ言ノ偶々及ビタル者、遂ニ重キヲ

分出變化ノ法則上ニ置カズ其然ル所以ハ其人
生觀ニ於ケル厭世主義將ク復歸主義ノ趨向ス
ルトエロコシテ現世ヲ以テ假現的トモナサン
トスルバ也之ヲ要スルニ易ト同シク天地開闢
説ニ本ツキシト雖モタバ合セラ本體論ニ及ヒ
シテ以テ一層高遠ノ趣アリ按スルニ太極即無
極、説、如キ蓋シカレヨリ派出セシナランカ
列子ノ一書眞實判シ易カラズ然レモ假ニ南
方ノ一思想家ト看做サンニ其篇首ニ見エタル
宇宙論ハ易ノ乾鑿度ト一致スル者、イワレカ其

本タルカヲ辯セスト雖モ本体ヨリ分出ニ及ビ
又夕頗ル幽妙ノ旨ヲ存ス

有太易有太初有太始有太素太易者未見氣者也太初
者氣之始也太始者形之始也太素者質之始也
氣形質具而未相離故曰渾淪渾淪者言萬物或
渾淪而未相離也現之不見聽之不聞循之不得
故曰易也易無形埒易變為一一變而為七七變
而為九九變者究也乃復變而為一一者形變之
始也清輕者上為天濁重者下為地沖和者為人
故天地合精萬物化生 (天瑞笑二)

莊子ノ宇宙開發ヲ論スルヤ謂テク天地此ノ
如ク廣ク萬物此ノ如ク多シ是レ虚相ノミ幻影
ノミ其本体ニ至テハ必ズ一ナラザル可ラズト
喝破スラク

天地與我並生萬物與我為一
萬物一也其所美善為神奇其所惡者為臭腐臭腐
復化為神奇神奇復化為臭腐故曰通天一氣
耳 (和北遊)

其一ナル者ハ何ゾ

有始也者有未始有始也者有未始有夫未始有

始也者有有也者有無也者有未始有無也者有
未始有夫未始有無也者俄而有無矣而未始有
無之果孰有孰無也 (齊物論)

有無ヲ離レテ始終ヲ脱シ名状スベカラザル者
呼テ道トイフ道ハ絶對ナリ

道未始有對

既ニ絶對ニシテ始終ナシ故ニ宇宙ハ永劫自在
ノ靈體ナリ仍テ翻テ其情状ヲ説テ曰ク

夫道有情有信無爲無形可傳而不可受可得而
不可見自本自根未有天地自古以固存神鬼神
帝生天生地在太極之先而不爲高在太極之下
而不爲深先天地而不爲久長上古而不爲老

(大宗師)

蓋シ莊子ハ謂ヘラク宇宙間ニ在ル萬種ノ事
物現象ハ各特殊ノ色相ヲ具ヘテ態萬状ノ模様
アリト雖モ打破一番、除カニ其實相ヲ檢スレバ
根本ニ於テ一致符合スル所アリ始テ終テ
去テ来テク度量ナク邊際ナク有無ヲ論シ難
ク言説ヲ擲イベカラズ然カモ千萬億ノ影象ヲ
開キ千萬億ノ物體ヲ具ヘテ千萬億ノ運用ヲナス

者ナリ是ニ於テ無邊無極無始無終ノ道ヲ立ニ
テ宇宙ノ本體トナシ道表ニ影象アリ影象ノ裏
ニ道アリ而カモ道ヲ離レテ影象ナク影象ヲ離
レテ道ナク一ニシテ二ニニシテ一即チ
色即是空空即是色、(般若心經)
ニ主義トスル者佛氏ノ

非有非空亦有亦空真如即萬法萬法即真如
起信論

ノ妙理ト寸毫ノ差異ヲ見ズ是レ南方思想ガ印
度思想ト類似ストイハル、所以而カモユ、ニ
分出變化ノ法則カ道却否定サルタルノ最モ留
意スベキナリ、

之ヲ要スルニ南方思想家ハ道ヲ以テ宇宙ノ
本體ニ名ケ現象ノ分出變化ニ至リテハ甚少考
究セズ或ハ以テ假現トナス故ニ余ハ之ヲ宇宙
道體論ト呼ブノ適切ナルヲ知ルナリ而シテ余
ハ斷言ス上古支那哲學家カ思索ヲナスニ方リ
テ苟クモ其宇宙論ニ關スルモノハ天地開闢說
ヨリ出ツルヲ以テ便益トシタルヲ蓋シ是レ史
的觀念ノ尊重ニ出ツル者ニシテ獨立思想ノ自

由發露ト相待ツニ及テ南北ニ大思潮ノ湧起ヲ
見タリシナリ

支那上古ノ宇宙論ハコニ盡キ又戰國時代
學者ナキニ非サルモ時勢ノ必要上ヨリシテ國
際問題及ヒ政治經濟ノ議論ヲ主トスルニ至リ
絶エラ高妙ノ思索ナシ況レバ漢初ニ於テハ
但シ、コニニ注意スベキハ術數家ノナリ是
ハ山東神仙說ガ南方思潮ト抱合シテ佞道教ト
ナリ^シ對シ一種狡猾ノ徒書經中ノ五行說ヲ曲
解シ易ノ外形ヲ取リ陰陽五行生剋制化ヲ豫ト

シ占候ヲナス者ナリ之ヲ其表面ヨリ見レバ全
ク易ノ支流タル如シト雖モ實ハ然ラズ其原理
ノ大本ハ即チ曰ク物生スレバ象アリ象生スレ
バ數アリ乘除推闡造化ノ源ヲ究ナシトスト已
ニ數ヲ以テ其起點トナス故ニ彼土ニテ時ニ數
學ノ目アリ星土風物ノ經傳ニ見ユルモノ流傳
シテ妖妄ニ至リ寢ノ其真ヲ失ヒテ其之ヲ始
メシハ誰ナルカヲ詳ニセズト雖モ術數ノ書ノ
著作ハ焦延壽ノ易林ヲ以テ嚆矢トナス其書易
ノ六十四卦ヲ重テ四九十六卦(64²)トナシ各繫

クニ録詞ヲ以テシタリ文皆韻ヲ押シ辭句頗ル
奇奥又夕之ヲ實際ニ試ミテ驗アリシトイフ次
ニ京房アリ焦氏ノ學ヲ傳フ故ニ術數ヲイフ者
焦京ヲ稱セリ而シテ房ノ災祥ヲ推衍スル更ニ
迄壽ヲリ甚シ其書凡ソ十四種今其十三ヲ逸シ
獨リ易傳十三卷ヲ存スルノミ但シ此書ハ寧ロ
易ノ正ニ近クシテ其本色ヲ同フニ足ラズ今世
錢トノ法又夕京氏ヨリ出テシトフ蓋シ西氏ノ
一固ヨリイフニ足ラズ然レモ易ヲ剪裁模擬シ
クルノ一事ハ誠ニ破天荒ノ行爲ニシテ當時沈

睡セル學界ニ多少ノ刺激ヲ與ヘシトナシトイ
ハズ陳吳已ニ起ル項劉豈ニ獨リ出テサランヤ
西氏ニ次テ易ニ擬シ書ヲ著ハシタル者ハ揚雄
其人ニシテ太玄ノ一書是ナリ而カモ前起者ハ
タバ勤機ヲ與フルニ過キズ後出者ノ價值アル
モノナルハ事實ノ常ニ證スル所太玄ハ屢述ヘ
タル如ク主トシテ易ニ擬セシト雖モ所說頗ル
大ニシテ體制系統頗ル整然タル者アリ固ヨリ
焦京ノ妄ニ似ズ優ニ漢代ノ著作界ニ地位ヲ占
ムル唯一ノ哲學書ナリ余ハ是ヨリ其ナルヲシテ敘述ニ移

ラントス。

一本論、發端終

(二) 叙述

第三章、玄ノ本體の方面 (南方哲學ノ是認)

揚子ノ玄ハ形而上、形而下ノ二意義ヲ有ス其形而上ニ屬スル者ハ宇宙本體論ニシテ玄ク之ヲ老子ニ得タル者ナリ蓋シ法言ニ曰ク

老子之言道德者有取焉耳及榘提仁義絕滅禮

學者無取焉耳 (問道篇)

知ルベシ彼ハ實際の方面ニ於テハ老子ノ言ヲ取ラザルモ理論の方面、少クモ宇宙論ノ考察ニ於テ大ニ其所説ヲ是認シ採用シタルナルヲ

而シテ是ハ又々頗ル正當ナル事ニ属スルヲ覺
ユ蓋シ老莊等南方思想家ハ時勢ノ紛亂ニ對シ
其人種的心情ト理想的性質トニヨリテ實際的
方面ニ関シテハ故意ニ若クハ不注意ニ奇矯過
激ノ說ヲナセシ者ナリ然レモ其至理ノ極ヲイ
ヒ無虧ノ序ヲ明カニスル形而上論者ニ於テハ
易ト其起源ヲ同クシ更ニ高遠ノ域ニ進ミタル
ノニ必ズシモ相背馳セズ是故漢代ニ並ヒ行ハ
レ更ニ後代ニ於テ少數ナガラ兩者ノ調和ヲ計
ラントスル者ヲモ出シタルナリ

老莊ニ子が宇宙ヲ包括ス元者テ道ト名ケタルニ
對シテ揚雄ハ之ヲ玄ト呼ベリ而シテ玄ハ道德
經中數處ニ散見スル字ニシテ老子ハ道ニ
關スル形容贊美ノ辭トナセリ

故常無欲以觀其妙常有欲以觀其徼此兩者同
出而異名同謂之玄玄之又玄衆妙之門 （第一章）

谷神不死謂之玄牝之門玄牝之門是謂天地根
（第二章）

滌除玄覽能無疵乎 （第十章）

生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德。

王弼曰ク玄者冥也默然而無有也即々神秘幽奧

不可思議ノ義ナリ而シテ雄ハ玄道ノ二字ヲ差

別シテ用ヒ玄ハ前述ノ如ク老子ノ道ノ第一義

即々天道ニシテ道ハ現象中ノ原理ニ屬シ老子

ノ道ノ第二即々人道ニ相當シ唯ダ更ニ廣濶ナ

リ然レモ亦タ必ズシモ、カクナラズ。

サレバ爰ニ宇宙ノ本體トシテ論究スベキ玄

ハ老莊ノ所説ト同シク幽妙ニシテ最初原的ノ

者ナリ而シテ終ニ具體的ニ解説スルヲ得ズ、タ

ゞ時度位ニ關係シタル發現ヲ種々ノ方面ヨリ

觀察シテ之ノ性質ヲ略見シ得ハク之ヲ綜合シ

テ不完全ナガテ領得スベキナリ

玄ハ其經界モトヨリ闇ク其根本モトヨリ深

ク幽冥ニシテ弘遠視レトモ見エズ聽ケドモ聞

エズ寂タリ寥ナル者是レ直ニ絶對ニシテ超自

然、抽象的原理トイフベク具體的實在ヲ有セ

ズ所謂無ナル者ニシテ萬物ノ根ナリ故ニ名ナ

ク源ナク沖ナリ空ナリ亦妙ナリ

夫玄晦其位而冥其眇深其阜而眇其根懷其功

而幽其所以然也 (玄攤)

宇宙ハ已ニ一個ノ玄體ナリ故ニ宇宙間ニ生滅
循環スル萬種現象ハ玄體中ニ起ル變化行動ナ
リ本體的玄ハ此等現象ノ根源トシテ之ヲ支配
スル者ナリ即チ古今ヲ通シ陰陽ヲ開キ萬物ノ
類ヲ開キ休咎ノ跡ヲ發シ遂ニ天地世界ヲ構成
スルニイタリ覆載間ノ森羅萬象ハ爲ニ一定ノ
規率ニ從ヒ生滅起伏シ終始循環シ決シテ紊亂
紛糾セズ上ハ日月ノ往來寒暑ノ交代ヨリ下ハ
人事ノ關係禍福ノ變化ニ至ルマテ整然タル形

式ヲ以テ運行スルヲ得是レ玄者用之至也トイ
ヘル所以ニシテ玄ノ本体ハ其カクアラザルベ
カラザル性質ヲ有スルナリ更ニ之ヲ細説スレ
バ下ノ如シ

玄者幽攤萬類而不見形者也資陶虛無而生乎
規擱神明而定摹通古今以開類攤措陰陽而發
氣一判一合天地備矣天日迴行剛柔接矣還復
其所終始定矣一生一死性命榮矣仰以觀乎象
俯以視乎情察性知命原如見終三儀同科厚薄
相靡圓則杌枳方則畷去嗆則流體冷則凝形是

故闔天謂之宇。闔宇謂之宙。日月往來一寒一暑一
律即成物曆。則編時律歷。交道。聖人以謀畫以好
之夜以醜之一晝一夜。陰陽分索。夜道極陰。晝道
極陽。牝牡群貞以攤。吉凶則君臣父子夫婦之道
辨矣。是故日動而東。天動而西。天日錯行。陰陽交
巡。死生相糝。萬物乃纏。故玄騁取天下三合而連
之者也。綴之以其類。占之以其辭。曉天下之賾賾
瑩天下之晦晦。其唯玄乎。 (玄攤)

更之玄ノ本體ニ属スル特性ノ彰著ナル者トシ
ニ在ノ如ク列舉セリ

見而知之者智也。視而愛之者仁也。斷而決之者
勇也。兼制而博用者公也。能以偶物者通也。無擊
疎者聖也。時與不時者命也。 (一全)

更之之ヲ四者ニ概括シテ
虚形萬物所通ニ謂道也。因循無革天下之理謂
德也。理生昆群兼愛之謂仁也。列敵度宜之謂義
也。 (一全)

トイヘリ蓋シ是レ人間ニ附属スル倫理上ノ用
語ヲ以テ宇宙本體ノ特性ニ適用シタルナリ故
ニ少シク鄙俗トナシタルノ嫌ナキニ非スト雖

モ南北西東潮ノ調和ノ一端ニ外ナラズト見バ
又ク其徒爾ナラザルヲ知ルベシ

之ヲ指言スレバ玄ノ用ハ一定ノ規率ニ從テ
宇宙萬象ヲ開發スルニアリ其規率ハ永劫不廢、
而カモ動力ノ質料ノ分量ニヨリテ種々ノ現象
ヲ生ズ道德仁義ハ玄ノ本体ノ特性ニシテ活動
分出ノ根源也

兼道德仁義而施之之謂業也 (全)

以上ハ玄ノ活動作用ノ部分ヲ見テ因テ玄ヲ
緝贊形容シタル者ナリ然レモ是ノミニテハ不

十分ノ感ナキニ非ズ故テ以テ更ニ玄全体ヲ舉
ゲ之ヲ嘆稱シテ曰ク、

玄卓然而示人遠矣曠然廓人大矣淵然引人深
矣渺然絕人眇矣

仰而見之在手上俯而窺之在手下企而望之在
手前棄而忘之在手後欲遠則不能理得其所者
玄也

其上也縣天地也下也淪淵織也入巖廣也包矚
其道游冥而抱盈

以上玄攤

皆云ノ神秘ニシテ其作用ノ靈妙ナル到底形容
表現スル能ハサルノ意ヲ改セルナリ

以上ノ所説全ク老莊ト差違ナシトイフモ不
可ナシ唯ダ言辭ヲ異ニスルノミ遮莫揚子ハ南
北西恩潮合流ノ中ニ立ツモノナリ故ニ少クト
モ西者ヲ調和セントカメタル者ナクハ非ズ
カクテ宇宙本体ノ考察ハ之ヲ老莊ニ得タルナ
リ更ニ進テ宇宙現象ノ方面ヲ觀シニ蓋シ之ヲ
易ニ得クリ其波動ノ原理タル陰陽ハ西氣ノ如
キハ全ク之ヲ採用是認シクテ而シテ現象變化
ノ法則ノ如キ亦遂ニ否定セラルナリ其故也ナ
シ彼ノ學問ノ真正ノ基礎ハ飽クマテ儒教ナリ
老莊ニ對シテハ或方面ヲ斥非シタレモ周孔ノ
説ニ對シテ毫モ疑點ヲ其間ニ容レケレハナリ
余ハ次章ニ於テ其是認シタル北方哲學ノ宇宙
現象原理ニ就テ聊カ説ク所アルヲ得シ

第四章 玄ノ活動的方面

(上) 宇宙現象ノ原理

(北方思想ノ是認)

北方宇宙論ノ主要ナル論點ハ現象ノ原動力
タル陰陽兩氣ト變化法則トノ認定ニ在リ今揚
子ハ首ニ其陰陽兩氣論ヲ繼承セリ

禁天功明萬物之謂陽也幽無形深不測之謂陰
也陽知陽而不知陰陰知陰而不知陽知陰知陽
知止知行者其唯玄乎 (云 攤)

陰ト陽トハ均シノ玄ノ本体ヨリ發立シテ對立
スルニ動力ノ名ナリ而シテ各自反對ノ性質ヲ

有シ自ラ關係シ合同セズ唯ガ玄ノ神秘的性質
ハ善ク之ヲ主宰シテ互ニ補充シテ運行活動シ
以テ宇宙ノ現象ヲ發出セシム

陰陽兩氣ノ活動ハ現象ノ本源ナリ方位之ニ
由テ生シ曆象之ニ由テ起リ盈虛消息ハ環ノ端
ナキカ如ク日月ノ代明スルカ如ク其凝積シテ
現ハレシ結果ハ剛柔トナリ晝夜トナル而シテ
晝夜相干シテ萬物ヲ成セナリ剛柔ノ人事ニ於
テハ亦然リ物盛ナレバ衰ヘ玄窮レハ變ス天地
虛贏或流レ或ハ止ル故ニ常ナシ常ナケレトモ

自ら規率ナクシバアラズ易ニ所謂

天尊地卑乾坤定矣卑高以陳貴賤位矣繫辭傳
トイフ者即チ是ナリ故ニ曰ク

察龍虎之文觀鳥兔之理運諸來政繫之泰始極
焉以通璇璣之統正玉衡之平圓方之相斫剛柔
之相干盛則又衰窮則更生有實有虛流止無常
夫天地設故貴賤序四時行故父子繼律曆陳故
君臣理帝變錯故百事辨質文形故有無明吉凶
見故善惡著虛實盪故萬物經一云攤

陰陽西氣ハ宇宙現象、原理ナリ天地人ハ三才

皆之ヲ藉テ開發ニ形成ス

立天之經曰陰與陽形地之緯曰縱與橫表人之
行曰晦與明陰陽曰合判縱橫曰緯其經晦明曰
別其別陰陽該極也經緯所遇晦明質性也陽不
陰與合其施經不緯無以成其誼明不晦無以別
其德陰陽所以抽責縱橫所以整理也明晦所以
昭事也（玄瑩）

何ゾ其易ト似クルノ甚シキヤ彼ハ陰陽剛柔仁
義トイヒ此ハ陰陽縱橫晦明トイフ全ク其所說
ノ方法ヲ左フス知ルベシ皆是レ左一動力ニシ

宇宙間消長ノ二元素ナルヲ、

天地人ノ三才、皆是陰陽西氣ノ發現ノ故ニ
共通ノ規率ナリシハ非ズ換言スレバ三才皆一
個ノ小玄體ノ宇宙全体ヲ包摂スル太玄ニ附
着含有セラル、法則形式ハマク個々ノ玄體ニ
モ隸属シテ存在セズバアラス故ニ曰ク
夫玄者天道也地道也人道也兼三道而天名之

(玄圖)

而シテ玄ノ法則ハ天地ニ於テヨリモ人ニ於テ
最モ著リ現ハル故ニ其人ハ自ラ玄體タルノ心

腹ヲ有シ自ラ願ヒマク之ヲ擴充シ太玄ノ規率
ヲ領得スベシ是レ學問カ真理ヲ探究スル根本
基礎ナリ揚子之ヲ論スルヤ、明晰ヲ缺キタレ
トモ裏面ノ深意ハ此ノ如キモノナルベシ故ニ
曰ク

玄者神之魁也天以不見爲玄地以不形爲玄人
以心腹爲玄天奧西北鬱化精也地奧黃泉隱魄
榮也人奧思慮含至精也天穹隆而周乎下地旁
薄而向乎上人蒼々而處乎中天渾而擇故其運
不已地墮而靜故其生不遠人馴乎天地故其施

行不窮

（五告）

以上陰陽兩氣ノ論ヨリ施イテ真理探究ノ可能ニ至ル皆易ノ敷衍シタル者ナリ是レハ宇宙現象ノ動力ヲ論セシ者ノミ。而シテ現象變化ノ法則ハ又々易ニ盡キタリ揚子ハ一言モ之ニ及バズ蓋シ十分ニ之ヲ承認シタルノ極特ニ積スルヲ須トズトナシテバナラズ。記清セヨ。彼ハ根本ニ於テハ全ク儒教主義ノ人ナリシヲ此ノ一事特ニ必要ナキガ如シト雖モ論理上ノ關係ニ於テ敢テ忽ニスベカラザル者ナリ

玄ノ本体の性質ニ関シテ南方思想ヲ是認シ其沈黙の方面ニ関シテ現象關於ノ動力及ヒ變化ノ法則ハ北方思想ヨリ取リタル揚子一部ノ宇宙論ハ更ニ獨創ノ見地ナキニ非ズ彼レ以爲一ラク萬種ノ現象ノ發達完全ニハ自ラ一定ノ形式ナキ能ハズト是ニ於テカ外觀ヲ易ニ擬シタルハ十一首ノ階段的説明ハ作ラレタリ。

(宇宙現象の形式 (獨創的見解))

凡ソ宇宙間ノ現象ハ三期ヲ分テ其開度ヲ完
 成スルヲ見ル今假リニ世界ノ開闢ヲ考フルニ
 初メニ天成リ次ニ地成リ後ニ人成ルニテ物質
 上ノ意義ニ取ルバ三才ノ發生トイフニ過キサ
 レトモ時間的ニ之ヲ考フレバ天ノ成リタル時
 ヲ以テ開闢起ルトナスベク地ノ成リタル時ハ
 其過程ノ中ニ達シタルキトナスベク人ノ成リ
 タル時ハ其完全シタルキト看做スヲ得ベシ
 且ツ夫レ太玄ノ中ニ起ル現象ハ物質上ヨリ

區別シテ均シク天地人トイフ是レ陰陽兩氣離
 合ノ度合ニ關係シテ然ル者ナレトモ均シク小
 玄體トシテ太玄ヨリ分出シタルモノナル以上
 其發達ノ次序狀況ハ皆同一ナリ例セバ天ニ在
 リテ日月ノ旋行ナル如キ地ニ在リテ動植ノ生
 滅ナル如キ人ニ在リテ禍福ノ交代スル如キ誰
 ガ之ヲ全ク相異リタル狀態トイフ故ニ宇宙現
 象ニ共通ナル發達ノ形式ハ決シテ断定スベカ
 ラザル者ニ非サルナリ而シテ是レハ動カタル
 陰陽兩氣ノ關係ヨリ立論スルヲ以テ適切ニシ

正當必要ニシテ十分トナスベシ

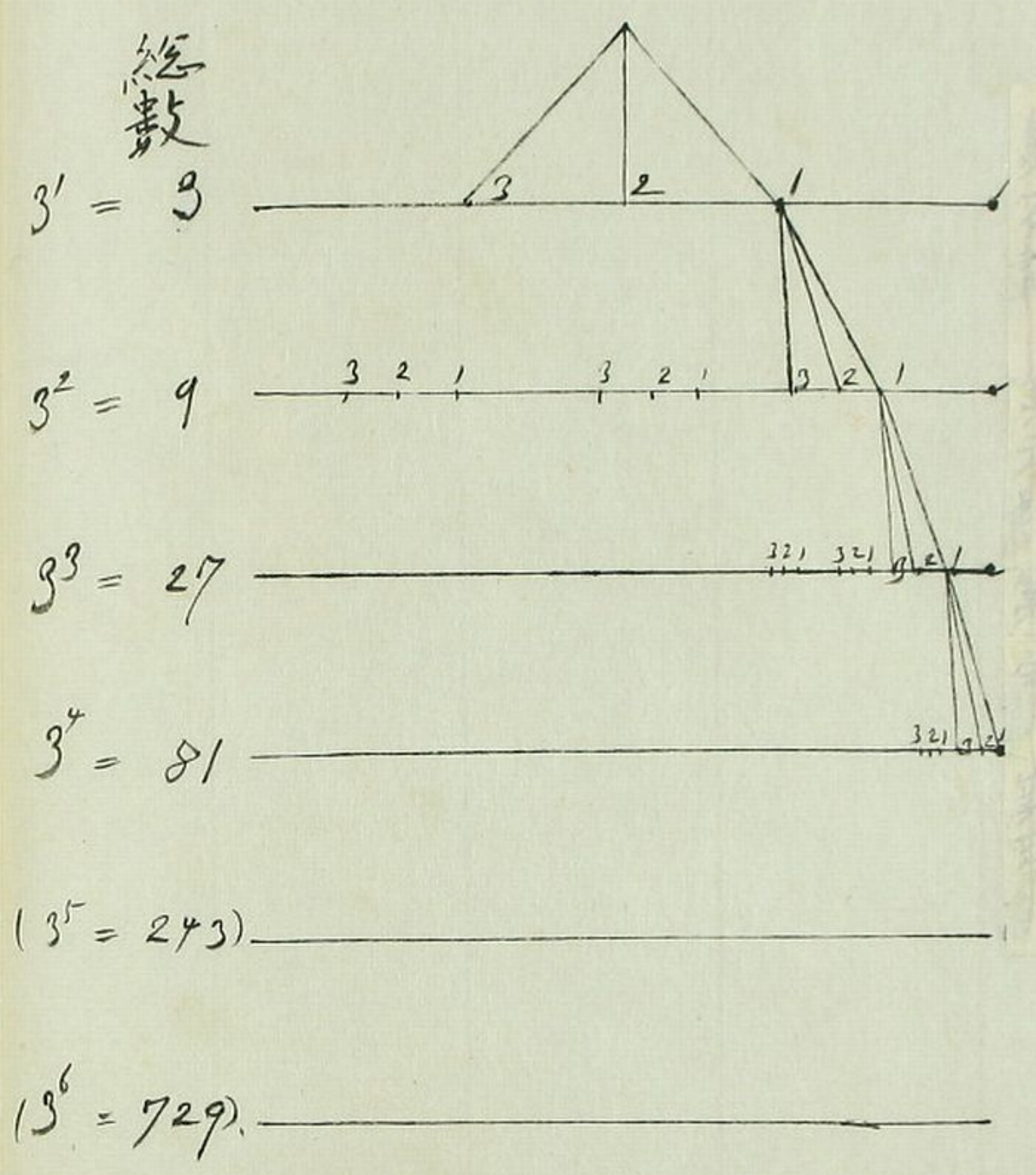
サレバ宇宙現象ノ各個皆玄体ノ始源の分出
ト同シク先ツ三時期ヲ劃スベシ

天三椽而乃成故謂之中終始地三椽而成故謂
之下中上人三椽而乃成故謂之思禍福 (五卷)

而シテ玄体ノ特質トシテ其部分ハ全体ト同一
ノ關係ト狀勢トク保有ス現ニ天地人ノ各ガ其
之ヲ分出シタル太玄ト同性質ヲ有シ、天道地道
人道ハ即々直ニ玄ナリト謂フヲ見テモ明ナリ
故ニ三期ハ分ク、九期トナスベク、九期ハ又々分

テ二十七期トナスベク、二十七期ハ更ニ分テ八
十一期トナスベク以下無窮ニ至リ其公式ハ 3^n
トナルベシ然レトモ之ヲ分ツコト細小ナレバ
細小ナル程其説明ハ精緻トナルベキ筈ナレド
モ唯ダ是レ連續的階段的説明ナレバ各期ノ特
況漸次近似スル傾向アリ加フルニ人間ノ言語
文辭ハ自ら制限アリテ且ハ頗ル不完全ナルヲ
以テ徒ラニ勞多ク功少キニ終ルノ虞アリ故ニ
恰好ノ程度ニ於テ止メザルベカラズ揚子ハ 3^n
ノ公式中 3^n トナシ之ヲ八十一期ニ分テリ

今之ヲ圖解セバ左ノ如シ



考

第四分劃ニ於テハ十一期ニ分レタリ今其八十
 一期ノ各ヲ呼ブニ二方アリ一ハタビ第一期第
 二期トイヒ以テ第八十一期ニ至ルモノ、是ハ但
 ニ其第何分劃ナルカラ即次ニ知覺セシムルヲ
 得ズ一ハ「第何期」(第一分劃)「第何期」(第二分劃)「第何
 期」(第三分劃)「第何期」(第四分劃)ト呼ブ者ニシテ其
 今假ニ充テタル何ハ一、二、三ノイヅレカナリ。是
 レハ其分劃ノ度數ヲ表ハシ如上ノ圖全体ヲ道
 ヒ盡シテ餘蘊ナキ者ナリ然レトモ、カク數字ノ
 シヲ以テセバ複雑ニシテ牽亂ノ嫌アリ之ヲ避

クルニハ結局各分劃ニ名ヲ命スベキナリ是ニ
於テ第一分劃ヲ方トイヒ、第二分劃ヲ州トイヒ
第三分劃ヲ部トイヒ、第四分劃ヲ家トイフ故ニ
之ヲ呼ブニ第一方、第一州、第一部、第一家トドノ
如クスベシ然レトモ第一ノ字ハ必要ナキヲ以テ
省略ニ從ヒ太玄ノ八十一首ハ遂ニ一方一州一
部一家ヨリ三方三州三部三家ニ盡ク

コノ八十一家、四階段中ニ出ワル数字ハ一ニ
三ノ三個ニ過キズ故ニ一ヲ以テ一ヲ表ハシ、一
ヲ以テ二ヲ表ハシ、一ヲ以テ三ヲ表ハシ、全ク文
字ヲ用ヒズ記號ヲ以テ之ヲ表ハスヲ得、即チ三
三ヨリ漸々變化シテ三三ニ至リテ盡ク其分劃ハ
家ニ至ルヲ以テ之ヲ八十一家ト名ク其各家マ
夕名ヲ附セリ其目左ノ如シ

中周磧	閑少戾	上干姁	羨差童	增銳達
交奕僕	從進釋	格夷樂	辛從素	
更斷毅	裝衆密	親斂濡	瞬盛居	法應逆
遇竈大	鄧文禮	匪慮帝	度永昆	
減嗟守	翁聚積	飾疑視	沈內去	晦昔窮
割止堅	成闕失	劇馴將	難動養	

↑
回

第一分劃、第一ヲ天、ト名ケ、第二ヲ地、ト名ケ、第三ヲ人、ト名ツク、是レ前述、世界開成次序、ヲ以テ直ニ他ノ名トナシタルナリ、以上、三者各二十七家ヲ引率ス、之ヲ天玄、地玄、人玄ト稱ス。

八十一家之ヲ數ノ上ヨリ見レバ三異種ノ者ヲ四ツ宛配合シタル者ナリ(3)然レトモ其構成ハ次序ハ實ニ上ノ如クニシテ決シテ易ト類似セズ、是ニ於テカ知ルベシ太玄ノ八十一家ハ象ニ非ズシテ數ナリ而シテ是レ宇宙現象開成ノ階段的形式ノ之決シテ規率ニ非ズ、強テイハバ

太玄ノ八十一家ハ易ノ八卦ニ相當スルナリ故ニ假リニ之ヲ象數ノ上ヨリイヒテ六十四卦(82)ニ相當スル者ヲ作テバ八十一家ヲ各自ニ相當シテ(81)トナサシムルベカラズ、然レトモ易ノ八卦ハ或物或カテ代表スルニ配合スルヲ得シナレド玄ノ各家ハ同一現象中ノ狀態ナレバ遂ニ之ヲ配當スルヲ得ガルナリ。古來ノ注釋家ハ玄ノ或家ヲ以テ易ノ或卦ニ相當スル如ク説明センテテ企テタリ而シテ玄ハ八十一家ニシテ易ハ六十四卦ナリ故ニ易ノ或卦ハ玄ノ或ニ家ニ當

ルベキニ至ル是ハ此事トシテ根本的ニ別殊ナル者ヲ以テ牽強附會ヲ爲サントスル者遂ニ無用ノ贅言タルニ過キサリナリ。

太玄既ニ八十一家ナリ而シテ各家ニテ九ニ分ケ七百二十九贅トナス、即チ^クシテ前記ノ圖ニ於テ第六分劃ニ當ル故ニ方州部家ノ如キ名號ヲ六個撰テ^原記號的ニ表現スレバ七百二十九ノ數トナリ了シ各個ニ係辭ヲ附スレバ足ルベキナリ然レドモ是モ餘リニ複雑トナレバ、カクハ八十一家ノ中ニ包括セシメ唯ダ説明

ノ辭ヲ秩序的ニ附セリザレバ太玄ハ表面ニ於テ現象ヲハ十一階段ニ分ケシナレドモ實際ハ七百二十九階段ニ分劃シテ陰陽西氣ノ消長状態ヲ説明セル者ナリ。

其特ニ之ヲ七百二十九ノ數ニ止メシ者亦ハ頗ル故アリ是レハ辯證ノ章中ニ於テ細論スベシ

太玄ノ體制ハカクシテ成立セリ故ニ自ら贅シテ曰ク

玄有一道一以三起一以三生者方州部家也以

三生者參分陽氣以爲三重極爲九營是爲同本
離生天地之經也旁通上下萬并九營周流終始
也 (云圖)

↑
八十一首ノ係辭ノ如キ今之ヲ細詳スルニ暇ナ
シ而シテ、マク甚シク重要ノ一ニモ非サルナリ
何トナレバ、余カ前記ノ見解ヲ以テセバ、天啓自ラ理
解サルベク愈ヨ其確實ナルヲ證明スベシト信
スレバ、ナリ但シ、エーニ注意スベキノ一事ハ他
ナシ云ハ、或部分ガ全体ト類似スルモノナレバ
其基礎トシテ、初メノ三首ヲ領得シテ、累進的ニ

昇上スルカ若クハ、第一分劃ノ三大方ヲ領得シ
テ、漸次ニ下降スルカノ二法アリ、其一ヲ用ヒテ
サマデノ勞ナリシヲ構成サレシナラン、尤モ其
係辭ニ至リテハ、文章ニ老ユル者ニ非ズンバ、能
ハズ、何トナレバ、普通ノ場合ニ於テサヘ、意餘ア
リテ筆足ラザルヲ常トスルニ是ハ善ク文字ヲ
知り又ク、彼ノ詩經中ニ見ユル如キ、一層ハ一層
ヨリ深シ底ノ同義異度、一連ノ文字ヲ胸中ニ藏
シ自在ニ運旋スルヲ要ス、是レ揚子ニ多トスル
所、彼ノ字學ニ精通スルハ、其訓纂方言ノ著作ヲ

以テ微スベシ又々太玄ヲタゞ文章トシテ觀ル
モ多少ノ價値アル所以ナリ其奇字ヲ用ヒシハ
實ニ此故ニシテ冬深ク責ムルニ足ラザルナリ
故ニ玄首ノ係辭ヲ讀ム者ハ此點ニ注意シ十分
ニ精讀スルヲ要スルナリ
七百二十九贊ノ係辭ニイタリテ一々之ヲ陰
陽兩氣ノ合離ヲ以テ説キテ能ハズ各用字ノ因
難ナルガ爲ナリ故ニ是ハ易ノ係辭ニ倣ヒ具體
的ノ譬諺ヲ以テ通用セリ措辭ノ幽妙ナルハ即
チ此故ナリ

玄圖如左

附註

『陰陽五行等ハ排列シタル一ヨリ九ニ
至ル數ニ附セシモノニシテ象ノ象ニ
非ズ』(其論後章詳ナリ)

太玄ハ之ヲ占筮ニ應用シ得シ其筮法ハ玄數
ノ中ニ具ス蓋シ人事ニ關係シテ某事ノ開發過
程ノ如何ナル状態ニ在ルカヲ確知スルニ在リ
然レトモ是レ雄ノ本志ニ非ズ後世ノ註釋家却
テ重ク此ニ置キ遂ニ真意ヲ闡明スル能ハズ其
象數ヲ廢シ專ラ義理ヲ説クハ初メテ明ノ葉子
等ニ弔々ルトイフ。

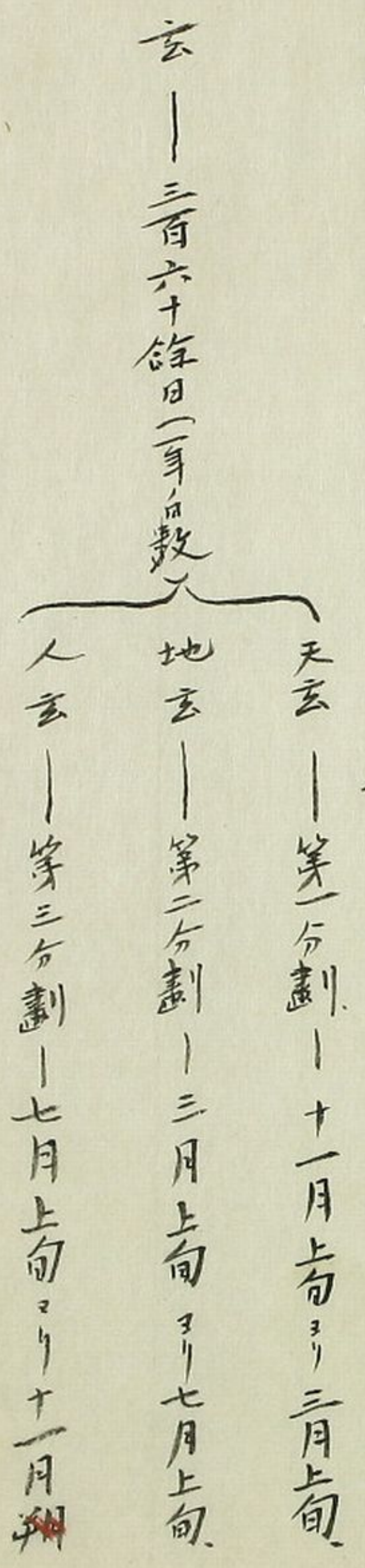
玄體ノ特質ヨリ演繹シテ規畫セシ太玄ハ十
一家ノ一大體系ハ實際ニ適用シテ真ナリヤ否
ヤ是レ此ニ起ルベキ至當ノ疑問ナリ揚子ハ歷

教ニ關係シテ其撞着セザルヲ證シタリ蓋シ歴
 々時間ノ函数ニシテ教ハ空間ノ函数(或場合ニ
 於テ)タルモノナレバ此兩者ニシテ愈日撞着ノ
 點ナク整然タル關係ヲ認メ得ベキハ此兩者
 ノ上ニ立ツ宇宙現象ハ依然トシテ太玄ハ十一
 家ノ形式ニ循從エト断定サルベケレバナリ

第二項 辨證

甲 曆トノ關係

一年ノ日數三百六十餘之ヲ一個ノ玄體の現
 象ト看做シ三分シテ天玄地玄人玄ニ相當スル
 分割ヲ求ムルニ左表ノ如シ。



揚子ハ此表中ニ見エル玄ト天玄地玄人玄ト
 ニ替辭ヲ附シテ形容シテ曰ク、

玄都覆三方方同九州枝載庶部分正群象事事
其中則陰實北斗日月昫營陰陽沈交四時潛處
五行伏行六合既混七宿軫轉馴幽推六甲內馴
九九實有律孔幽歷數匿紀闔象玄形贊載成功
(以上三意)

始哉中羨從百有權輿乃訊天雷椎做寧輿物旁
震寅贊柔微拔根于元東勤青龍光離于淵推上
萬物天地輿新

(以上天玄)

中哉更辟廓象天皇明雷風炫煥與物時行陰首
西北陽尚東南內離有應外能元貞龍幹于天長
類無疆南征不利過前光

(以上地玄)

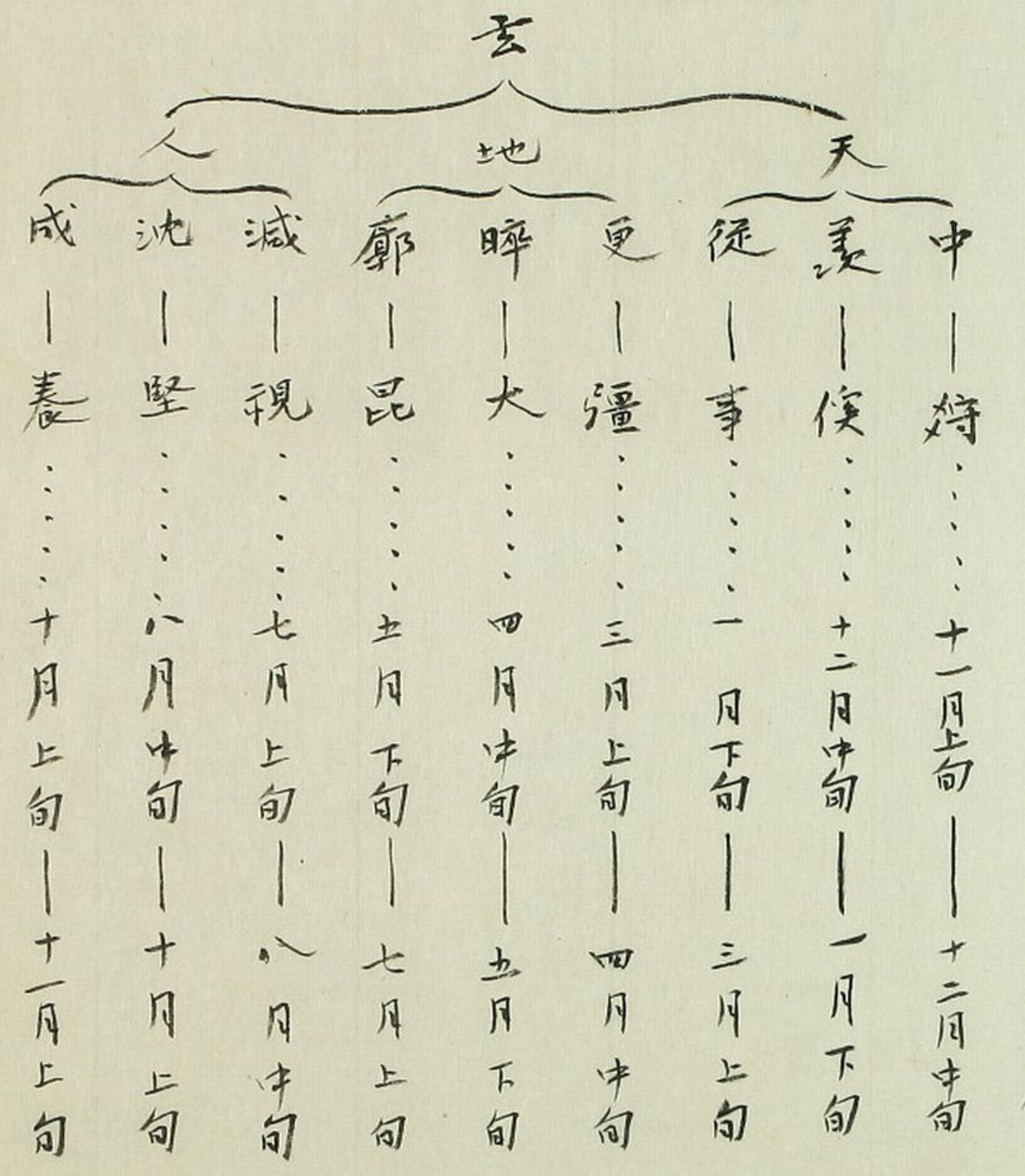
終哉滅沈成天根還向成氣收精闕入庶物咸首
艱鳴深合黃合黃純含生泰柄生行時監地營邪
謨高吸乃馴神靈旁該終始天地人功咸首貞

(以上人玄)

(玄圖)

又于二爻イヘル如ク以上ノ三分劃ハ陰陽西
氣、消長ニ關スルモノニシテ之ヲ其發生的動
力タル陽氣ノ方面ヨリイヘルハ始ハ即チ陽氣發

勤、起、中、中、即、發生、最高、點、達、シ、タ、ル
 片、終、ハ、即、チ、陽、氣、が、其、次、勤、ヲ、廢、止、セ、シ、片、ナ、リ、而
 シ、テ、陽、氣、始、發、ノ、期、ヲ、十、一、月、冬、至、ノ、日、ニ、置、ク、如
 キ、全、ク、易、理、ヲ、承、認、シ、採、用、シ、タ、ル、モ、ノ、フ、リ、
 以上、三、大、分、割、ノ、中、ニ、ゴ、タ、ル、一、家、ア、リ、テ、
 九、ツ、ニ、集、メ、テ、排、置、シ、其、相、當、ス、ル、月、日、ヲ、下、ニ
 注、セ、ハ、左、圖、ノ、如、ク、ナ、ル、ベ、シ、



又々其九分劃ニ替辭ヲ附シテ曰ク

誠有内者存乎中。宣而出者存乎美。雲行雨施存乎徒。

變節易度存乎更。珍光淳在存乎瞬。塵中弘外存乎廓。

削退消却在乎滅。降隊幽藏存乎沈。考終性命存乎成。

之ヲ概括スレバ

是故一至九者陰陽消息之計邪。

トイフ。

第二分劃ノ曆トノ關係ハ上ニ述ベタリ而シ

テ第三、第四、第五ノ分劃ヲ越ヘテ第六分劃ニイ

タリ七百二十九替ト曆トノ關係ヲ考フルニ七

百二十九ノ半ハ三百六十四半ニシテ略ボ一年

ノ日數ニ相當シ替ハ之ヲ二倍ニシタル者即チ

一年ノ日數ヲ晝夜ニ分ケタル總數ニ相當ス。故

ニ換言スレバ太玄ハ晝夜ニ分テ各年ノ各日ヲ

説明シタル者ナリ。

コ、ニ一年ノ總日數即チ地球ガ太陽ノ周圍

ヲ一周スル時間ハ近代星學ノ測算スルトコロ、

三百六十五日、五時四十分有餘ナリ而シテ支
那上古、天文觀象ノ進歩ハ略ギ之ニ近接スル數
ヲ認知タリ、顓頊曆ハ最モ古キモノニシテ一年
ノ日數ヲ

365.4

トナシ、漢代ニ行ハレタル太初曆ハ

365.2422

トナセリ、然レトモ大體ニ於テハ古今東西、帝ニ
顓頊曆ト同シ數ヲ以テ一年ノ日數トシ、四年一
回閏年ヲ置ク、一年ハ已ニ365.2422ナリト云ノ假

定スル一年日數トノ差ヲ求ルルニ、左ノ如シ、

$365.4 - 364.2 = 1.2 = 2 \times 0.6$

故ニ完全ニ一年ノ日數ヲ表ハスニ八十一家ノ
之ニテハ、此ノ如ク定ラザルトコトアリ、此ニ於
テカ更ニ二首ヲ加ヘ、躋ヲ以テ半ヲ表ハシ、羸ヲ
以テ女ヲ表ハシ、以テ補充セシム、

躋羸ノ二家ハ係辭アリテ、贊ナシ、固ヨリ一月
ニ定ラザル者ナレバ、之ヲ分說スルヲ能ハサル
ナリ、而シテ、ガリ太玄ニ躋羸アルハ、十ニ曆象ニ
閏年アルカシトイヘリ、是レ古來辨駁ノ在ルト

エロナレドモ實ハ止ムヲ得ナルニ出デシ者ナリ、

太玄ト曆トノ關係ハ實ニカクノ如シ、而シテ知ルベシ太玄ノ起發點ハ天地人ノ階段的分出ニヤリテ其分劃ヲ連續シツ、アリシガ其七百二十九贊ニ終リシハコノ關係ヲシテ明晰ナラシメシガ爲ニ分劃ヲ中絶シタルモノナルヲ。但シ是レハ人爲的ニ非ズ玄ノ三個分劃ノ特質ガ自然ニ曆ト一致シタルモノニシテ換言スレバ玄ノ特性ハ曆ニモ具備シタルナリ。玄ヨリ出ラ

タル「時間」ハ既ニ太玄ノ形式ヲ保有ス、コレト同シ理由ヲ以テ「時間」ノ中ヨリ出ラタル現象ハ「時間」ノ有ル形式ヲ有シ結局太玄ノ形式ヲ保有スルナリ一言以テ之ヲ掩ヘバ宇宙間ノ現象ハ其時間的關係ニ於テ太玄ノ所説ト一致シテ決シテ撞着セサル者ナリ

以上ノ證明ハ第一分劃、第二分劃ト第六分劃トヲ以テセシガ第三、第四、第五ノ分劃ハ曆ノ分劃ト其陰陽兩氣消長ノ狀態トニ名ナク且ツ説明複雑ニ亘ル、之、就蓋ナキヲ以テ故ラニ之ヲ

度外ニ措キシ者ト看做スベキナリ

(乙) 数トノ關係

一ヨリ九ニ至ル九個ノ数字ハスベテノ数ノ
根源ナリ十八巴ニニ位ノ数ナリ故ニ之ヲ加ヘ
ズ河圖洛書ハ今ニ傳ハラサレバ知ルベカラズ
ト雖モ周易之ヲ傳承シテ宇宙間ニ成形セル個
體事物ハ、レニナリカヘ十個ノ数字ヲ以テ表出スベキ者
トナセリ

天數五地數五五位相得而各有合 (繫辭傳)

註ニ曰ク天地之數各五五數相配以合成金木水
火土ト

揚子ノ教ヲ論ズル全ク之ニ序ツキテ更ニ細
密ナリ論述ヲナセリ先ハ初二各教ノ特性ヲ説
テ曰ク

思心乎一 反復乎二 成意乎三 伴暢着明乎五 極
大乎六 敗損乎七 剥落乎八 珍絶乎九 (全圖)

又曰ク

生神莫先乎一中 和莫先乎五 倨傲莫因乎九 夫一也
者思之微也 四也者福之資也 七也者禍之資也 三
者思之崇也 六者福之降也 九者禍之窮也 二五
八三者之中也 福則性而禍則承也 九虛設闕君

子小人所爲宮也 自一至三者貪賤而心勞 四至
六富貴而尊高 七至九者難咎而犯雷 五以下作
息 五以上作消 (全)

之ヲ説クニ人事ヲ以テシタレトモ其普遍的性
質ヲ推知スルノ教ヲ難シトナサズ 且ツ夫レ是
ハ太玄ノ第一分劃ヨリ演繹シ来リタル 観ナキ
ニ非ザルモ之ヲ以テ相互ニ關係ナクシテ提起
シタル命題トシテ看ルヲ要スルナリ
五以下ハ息(發生)ナシ 五以上ハ消(消滅)ト
スルヲ然レトモ是ハ陽氣ヲ序トシテ立論スルモ

一、故ニ五ヲ換言スレバ五以下ハ陽氣、始發ヨリ其極盛ニ至ル者、五以上ハ陰氣、始發ヨリ其極盛ニ至ル者トナスベシ故ニ一ト六、二ト七、三ト八、四ト九ハ其氣ヲ異ニシテ反對性質ノ者ナレドモ其勢力發動ノ状態ハ全ク同一タラズンバアラズ五ハ自ラ一種ノ特性ヲ有シ陽終陰始ノ西性兼有ノ者ト爲スベシ(十ヲ以テセバ至便ナレトモ二位ノ字トナル故用ヒズ)故ニ九個ノ數字ハ五ヲ對ニ分ケ現象トナリテ起ル時間的位置ニ於テハ異ナルモ空間的位置ニ於テ同一

一ナリ然ラザレバ同一勢力ヲ發動スル能ハス故ニ至便ニ考フルニハ共ニ圓周ノ上ニアリ一種ノ調諧的運動ヲナシ其回數ニヨリ陰陽ヲ定ムベキナリ奇數ハ陽偶數ハ陰ナリ九個ノ數字ヲ五群ニ分ツベシ其對比ハ左
如シ
一與六共宗ニ與七共明三與八成友四與九同道五與五相守 (玄圖)
アラユル數ノ根源タル九個ノ數ハナク分列シタリ而シテ其特性ノ同シキヲ以テ之ニ隸屬ス

ル事物ヲ舉リレバ左ノ如シ今左ニ三八ノ一群
ヲ載ス他ハ容易ク推知スベシ

三八、爲木、爲東方、日甲乙、辰寅卯、聲

角、色青、味酸、臭羶、形誦信、生火勝土

藏脾、性仁、情喜、事親用恭攝肅

徵星、帝太昊、神句芒、星從其位、類爲

鱗、爲雷、爲鼓、爲柝聲、爲新、爲蹀、爲

戶、爲牖、爲嗣、爲承、爲葉、爲緒、爲教

爲解、爲多子、爲出、爲予、爲竹、爲草

爲果、爲實、爲奠、爲疏器、爲規、爲田

爲木工、爲牙、爲青怪、爲執、爲狂、(云教)

又夕之、土德ヲ配シ再說シラ曰夕

罔直蒙首冥罔北方也冬也未有形也直東方也
春也質而未有文也蒙南方也夏也物之修長也
皆可得而載也酉西方也秋也物皆成象而就也
有形則復於無形故曰冥故萬物罔午北直午東
蒙午南酉午西冥午北故罔者有三舍也直者文
之素也蒙者七之主也酉者生三府也冥者明之
藏也罔舍其氣直觸其類蒙極其修酉考其親冥
反其奧罔象相極直酉相勅出冥入冥新古更代

陰陽迭循清濁相廢將來者進成功者退已用則
賤當時則貴天文地質不易其位 云整

ナホ進テ人事ノ文章制度モ此中ヨリ出ツトイ

維天肇降生民使其貌勤口言目視耳聽心思有
法則成無法則不成誠有不威梲擬之經也垂消
爲衣裳幅爲裳衣裳之示以示天下梲擬之三八
比札爲甲冠衿爲戟被甲何戟以威不格梲擬之
四九尊尊爲君卑卑爲臣君臣之制上下以際梲
擬之ニ七鬼神耗荒想之無方無冬無夏祭之無

度故聖人著之以祀典梲擬之一六時天時力地

力維酒維食爰作稼穡梲擬之五五 云梲

カリ如シ五行四方十干十二支五聲五色五味

臭ヨリ始メ覆載間ノ森羅萬物皆數字ノ中ニ包

括セラル周易ノ說卦ニモ此種ノ説明アレドモ

可卦ヲ以テスルガ故ニ五行ニ關シテ整正ノ排

列ヲナスノ能ハズ是レ太玄ノ特點ナリ

又夕單獨ナル事物現象ヲ見ルニ是レモ九ノ

部分ヲ有ス九天トイヒ九地トイヒ九體トイヒ

九竅トイヒ九屬トイヒ九序トイヒ九事トイヒ

九年トイフノ類皆然ラサルハナシ

九天一爲中天二爲差天三爲從天四爲更天五爲暉天六爲廓天七爲滅天八爲沈天九爲成天

九地一爲沙泥二爲澤地三爲沙崖四爲下田五爲中田六爲上田七爲下田八爲中山九爲下山他皆之ニ倣フ故ニ略ス(云々)

是ニ於テカ知ルベシ宇宙間ノ現象ハ其單一ト複合トヲ問ハズ又タ共起ト繼起トヲ問ハズ皆九ノ中ニ包含セラル、ヲ而シテ太玄ハ八十

一家及ヒ七百二十九贊ハ皆九ノ乘數ナリ故ニ宇宙間ノ現象ハ其空間的位置ニ関シテ依然太玄ノ所説ト一致シテ決シテ撞着セズ

エデニ曆數ノ兩者ヨリ立論シテ時間及ヒ空間ノ關係ニ於テ太玄ノ帝ニ真ナルヲ辨ヤリ場子是ニ於テ自ラ太玄ノ妙ヲ贊シテ曰ク

天地開闢宇宙拓坦天元起歩日月紀數周渾曆紀群倫品庶或合或離或贏或蹏故曰假哉天地昭函啓他罔裕於玄終始幽明表贊神靈太陽乘

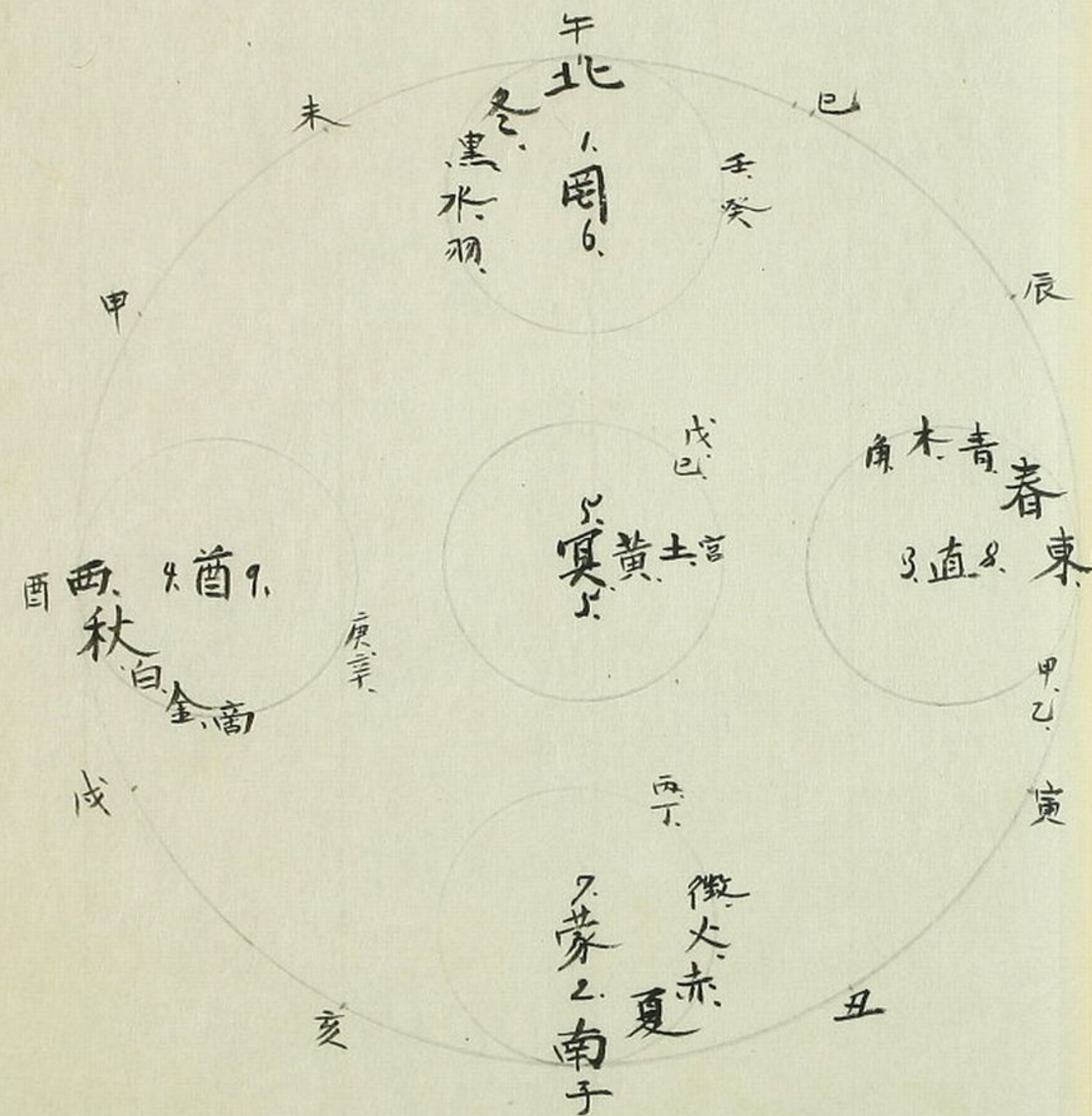
陰萬物該兼周流九虛而禍福結羅凡十有二如
群倫抽緒故有一二三以結以羅玄術瑩之
鴻本五行施重上下相因醜在其中玄術瑩之
天園地方植極中央動以曆靜時乘十二以達七
政玄術瑩之
斗振天而進日遠天而退或振或遠以立五紀玄
術瑩之
植表施景極漏牽刻昏明房中作者以戒玄術瑩
之
洽竹爲管室仄爲候以揆百度百度既設濟民不

誤玄術瑩之

東西爲緯南北爲經經緯交錯邪正以分吉凶以
形玄術瑩之 玄瑩

此ノ如キノミ

故曰太玄八十一家七百二十九贊ハ宇宙
現象開發ノ形式ナリト。



附記
 五行排列の圖セバ左ノ如シ

批判

以上太玄ヲ考察スルニ全ク一部ノ宇宙論ニ
シテ首ニ宇宙ノ序体ヲ論シ其分出ニ及ヒ又
獨創的見解トシテ階級的發達ノ形式ヲ断定セ
リ、易ノ六十四卦ハ宇宙現象變化ノ法則ニシテ
玄ノ八十一家ハ現象發達ノ形式ナリニ者全ク
異ル者ナリ否ナ西々相待テ宇宙論ヲ完全ナラ
シムルノコトサレバ易ニ擬セシトイフハ其著
作ノ體裁ヲ擬セシニ過キズ然ルニ前人似ル之
ヲ誤解シ玄ハ易ノ解釋ニシテ而カモ遂ニ效果

ナキコイフモノアリ其愚ヤ及ブ可ガラズ程伊
川曰ク

作太玄本要明易却尤晦如易其實無益真屋上
架屋牀上疊牀只是於易中得一數爲之於曆法
難有合只是無益

問太玄之作如何曰是亦贅矣必欲撰玄不如明
易邵堯夫三數似玄而不同數只是一般但看人
如何用之雜作十玄亦可况一玄乎

朱子引リトコ只潛室陳氏曰ク

易是加一倍法太玄加三倍法易卦六十四太玄
卦八十一太玄摸放周易六起數不同耳先儒謂
將易變作十部太玄亦得但無用耳

朱子曰ク

問太玄如何曰聖人說天一地二天三地四天五
地六天七地八天九地十甚簡易今太玄說得却
支離太玄如他八十一首却是陰陽中間一首半
是陰半是陽若看了易後又看那玄不成物事

皆誤解ナリ何ゾ其眼識ト理解トニニキキ甚
シキヤ司馬光ト雖モ亦リ其根本ニ至テハ未ダ
知ラザル者アラントス子雲ノ後遂ニ子雲ナリ

余甚少彼、高ニ斐ム

朱子ハユク揚子ノ「言ヲ以テ進延壽ヲリ出」トナヌニ似たり曰ク、

又問揚雄也是學進延壽推卦氣曰進延壽易也不成物事今人說進延壽卦氣不好是取太玄不知太玄都是學他

余ハ謂ヘラク易林ハタビ太玄ノ著作ニ動機ヲ與ヘタルモノナリト。

今更ニ「玄」ノ各部分ニ就テ論センニ「太玄」ノ高處ハ畢竟其宇宙卦論ニシテ南方思想ヲ揮擧

セシニ過キズトハトヘ更ニ之ヲ明晰ナラシメハ彼ノ切ニ歸セザルベカラズ朱子ハ流石ニ燃犀、眼アリ善ク之ヲ看破シテ曰ク

雄ニ學似出於老子如太玄曰潛心于淵美厥靈根測曰潛心于淵神不昧也乃老子說話

太玄中高處ニ是黃老故其言曰老子之言道德其有取焉

太玄之說只是老莊邵康節深取之者以其書挨傍洎來說道理

也、北方的思想、是認及ヒ獨創的見解、如キ

遂に其領得セザリレ所故ニ前人ノ細評ヲ聞カズ

以上略ボ前人ノ「太玄」ニ關スル批評ノ一斑ヲ示シ却テ之ヲ批評シ畢レリサレバゴ、ニ余ノ見ヲ述ブルヲ得シ。太玄ノ規畫スルトエロ南北西思潮ノ調和ハ大ニ成功セシ者トイハサルヲ得ズ唯ガ論スベキハ獨創的見解ニシテ余ハ之ヲ巧妙細緻トイハザルヲ得ズ其歴象ニ合ハサシナンガ爲ニ騎羸ノニ卦ヲ置キタルハ臨川吳子ノ所謂吁亦勞且拙矣ノ者ナレトモ蓋シ止ム

ヲ得ザルニ出テ以テ累トナスニ足ラズ其辯證ノ如キ多少ノ附會ト曖昧トヲ免レザルモ又ク以テ頗ル多トスベキナリヌベテ揚子ノ作爲セシ所ハ思想發展上ノ必然ノ事項ニシテ、唯ダ一唱ニ附セントスルハ遂ニ哲學的思索ノ價值如何ヲ知ラザル者ノミ「太玄」ノ一書豈ニ研鑽ヲナスニ足ラズト謂ハンヤ。

(完)

遊船嶽記

陸羽之境峰嶂重疊亂峙其最雄峻卓偉者爲船嶽
高五千仞稱爲東北巨鎮而廣瀨之一派發源乎此
間迴曲盤旋奔流激湍山水怪奇之狀足以游觀余
在仙臺每有暇日瘦策輕鞋四經星霜概盡景勝其
遊船嶽巖抵定義祠者二回然未爲之記且聞山中
之幽邃神異者孰矣因思再游而未得期也今茲甲
午十月念五日結束出寓誘神谷生與偕至落合路
歧爲二乃右折沿廣瀨川而上此日天氣晴朗秋空

地字安
蒲字不

一碧不見纖翳涼意瑟瑟殊覺可體既涉一阪從是
路較平夷長林十里紅葉頗豔行四里得一小店就
啖午餐店前有石標署曰距定義二里廿二町又發
路出崖側屈曲崎嶇水流奔馳崖上處處懸小飛泉
流沫灑雪冷氣沁身行至高沙山下峭壁數十百仞
歎立俯壑石骨露出峰容頗奇山轉路窮有隧道鑿
山腹長半町許過之則溪勢頓蹙迫一水劈之衝濤
旋瀨響如雷霆對岸巖石岌岌錯疊作大小斧劈之
痕紅楓黃蘿點綴其罅青松翠柏蟠屈其面崖上茅
屋兩三恰似畫中者行數十步憇孤店呼酒店媪供

清字
亦此

蕈味太美因連傾數太白而去既而峽勢開朗田塍
平曠滿目豁然漸行復出溪上有一橋柱梁朽頽脚
下急流如瀑令人不覺瞪目已渡溪水清淺奇石怪
巖起伏踳踳有一飛泉高十餘丈宛如垂一條之素
練頗奇觀矣而兩岸樹色飽霜鮮紅欲燃夕陽映發
光豔璨爛恰如曝千幅之雲錦忽而冷風蕭颯起自
溪底落葉紛飛摩於空中颼颼作響復翻落水中
波面亦為浮錦繡行少許遂至定義祠祠在山間小
村落中堂宇廢頽雕飾剝脫其創建頗古相傳平氏
之西走也其臣平貞能追及福原諫其失計不聽乃

歸夜入京師發內府重盛墓奉骨^{遺骸}遷於帝陸派離困
頓之餘遂來東奧誅^命結屋除蒿萊拓田畝樵蘇耕
耘日祈死者冥福即此地也及其^卒從者七人悲痛
不措建祠墳上安阿彌陀像所謂定義如來也像長
一尺二寸^{神氣}形容活動彩色精妙蓋重盛嘗以黃金三
千兩獲於宋國育王山者而其^冕後傳貞能云七從
臣皆殉葬諸祠後小丘植木標焉其子孫生齒蕃殖
不與世相問降及慶長年間伊達氏治仙臺山谷日
闕^{人戶}日盛始通外人而彌陀祠亦鬱然為士女所
渴仰其名漸著其以定義冠彌陀者^{定義}貞能邦訓
相同也祠左有一小菴曰西方寺掌祠事藏古釜及
鞞皆貞能遺物云祠後小丘老樹成林巨幹參錯
敗葉深布地上踏之簌簌然^謂七從臣墓標之樹也
丘頂又有枯樹二木抱合枝幹擁腫謂之連理櫟其
下有小石龕頗缺損曰天皇塚祀安德帝因想余今
夏西遊吊壇浦古戰場上阿彌陀寺後丘親拜山陵
今復見此遺跡低回不能去嘗試論之平族^緣小亂
建微功擅列朝位專務鴟張茂視王家幽閉法皇嗚
迫上皇貶斥大臣以擁外孫^繼祚之孺子罪惡貫盈
宜其一朝運傾神人弗助也貞能獨知其機削跡滅

形衣表褐拾橡栗以奉祭祀其耿介孤忠何其可悲也而忠魂義魄千歲如生付託憑依佛像以靈矣祠之所在地一名大倉倉方言窮谷之義也今見其地勢山谷幽深人跡阻絕真塵寰外之一小仙境也余前讀竹堂齋藤馨所作大瀑記其中有言曰凡此間境僻而勢阻幽潛隱逸之士所樂也相傳平氏將士西海沈沒之餘或晦跡於此子孫不與世相接闕數百年始入我藩版圖世以比之於漢土武陵桃源焉余遊其地百方問之而無殊可徵者後曾一到此乃知竹堂所記檢搜未足偶致過誤也蓋此與彼鄰郡地勢亦酷相似但此地獨有遺跡歷歷足徵者而存焉然竹堂之所謂均是勝境也桃源漁郎歸棹之後靡人至者而淵明之文能使後世拭目今此地也高貴造焉士庶游焉而未有文以傳之者則幸不幸果如何哉者余今特於此地亦云爾蓋前之所經者既可以為多而船嶽之勝未及見於是不覺神魂飛越也時天方暮還投祠前民家晚與神谷生傾觴滿酌吟嘯移時既得尊者將以明日游船嶽也喜不成寐

明二十六日雨興忽沮悶亦甚偶平戶某來過三人深喜奇過也曰昨遊白鬚山下溫泉今將還去也余

止之曰、余等欲登船嶽、思明日必霽、子寧無意哉、且
與其^帶衿^帶在此、不若遊溫泉、子其爲先容、乃懇囑導
者、衝雨急行、至材木巖、一名角石、石柱高二丈、方七
八寸、壁立削成、矗々如鹽、列梁栢、又一奇觀矣、相傳
負能初來此也、有樵夫怪爲賊也、急還聚徒、行欲捕
之、而至前、其所伐之木、化爲此石、大驚以爲神人
也、倉皇逃還、相戒不再入此山中、固齊東野人語、不
足信耳、渡川踰嶺、雨益暴、山路泥滑、移步太艱、嶺西
有一奇峰、勢欲飛翔、曰金雞山、特多紅楓、時濕雲變
幻、掩蔽隱顯、不可端倪也、下嶺則有厦屋、一水當其
後、爲三層飛泉、環流至屋前、而峽勢窮隘、宛似一小
洞天、即溫泉之所在也、主人見平产某、且怪且喜、驩
待備盥、乃脫濕衣、投浴室、在巖竇中、設二槽、其一自
竇底涌出、微溫、其一加水增溫、共清澄瑩澈、可鑑鬚
眉、此日無聊、不禁探浴、數回、而風雨終日不歇、檐溜
如繩、置酒排悶、盤盃皆山味、野羹殊多、葷入夜雨、纔
止、時見星芒西三、然山中陰晴不定、瀟瀟之聲、攪夢
者、不知幾回也、明二十七日早起、風雨無跡、微霞抹
山、始觀鬱藍天、狂喜不措、連聲呼快、余亦誇臆測之
幸、不謬也、急命杖屨、待導者良久不來、乃還定義祠、

得之皆持齋二日糧輕裝而出又取前路自金鷄山下
左折入林間從是平夷坦途稱十里平木葉盡脫寒
風蕭陵枯樹無復紅於之可觀者豈非以深山寒氣特早也
之故乎漸行路較險忽有一朽木當路菌蕈叢生採
之得數百如此者數回凡四里至四瀝此地本產銀
其質佳良先豪賈數人相謀投資發采掘又為造一大
新路然中道蹉跌無復繼起者有一茅屋臨溪負山
蓋為採鑛者藏百般器具處今惟充登山者宿泊用
耳乃留所齋糧食而去路全絕鹿狐跡熊徑懸崖絕壁
之上僅穿一綫萬木參天遮蔽日光陰寒晦昧走翠
常濕而洶洶鞞鞞之聲起四方響應呼動如海濤驟
作坤軸欲搖導者曰此邊特多飛泉惟以無路未有
覩之者崖上之路漸盡踰嶺渡川者十數回其間巖
石刺足溪水駛流揭蹠而前往困苦殆極渴甚每見清
泉必掬行三里至一嶺頂細徑交錯問諸導者曰其
左者羽前觀音寺之路凡四里其右者直可達船嶽
頂凡一里有半而其前者至御所山祠御所山祠如
何曰御所即五所之訛合船形高倉赤倉駕籠荒神
等五山之神記之謂也故或稱五聖祠在船嶽中
腹距此凡二里今夫高倉赤倉之諸山在背後歸途

或可至惟荒神之山最遠猶距五里自定義至者宜
攜三四日糧也苟一拜御所山則諸山不登觀亦可
也且最富奇勝奴請先馬乃隨之下嶺懸崖款側有
鐵鎖垂焉長數十間攀援而降有泉幽幽然呼曰泉
源正盡水皆西流導者曰是為陸羽境溪即最上川
之源也有二小瀑曰白瀑曰紫瀑當時水枯之奇觀
殊為可惜又攀鐵鎖而上崖頂有石門高一丈餘
濶六尺長二間稱胎內竇其色黝黑其質堅硬鬼斧
神工令人瞪目余前年游上毛妙義山觀所謂四大
石門規模之大此遠不及彼而怪特嶮異則復過矣

匍匐出竇又有鐵鎖中斷顛轉而下砂礫俱滾行溪
澗中少許達御所山祠祠小且頗頽破傍崖二瀑懸
焉高各數十丈左者其水純白曰雄瀑右者其水丹
紅瀑勢稍小曰雌瀑飛沫散霧幽雲滃勃冷風四起
衣襟沾濡心骨覺寒又行途多奇勝有七福神巖地
藏巖荒神巖等皆因形名其砂石散布處曰賽河原
溪水殷赤似血者曰流血溪池水紅白之色相半者曰
水神靈池導者一一指示合掌為拜余輩笑而一瞥
耳中世浮屠氏之徒入名山絕壑到處立祠開道概
以擬冥府地獄一石一水皆付其名蓋人之好怪者

甚而今古皆然故能行此豈技耳然而觀山水奇絕
之狀雖余輩未曾不信造物者之誠有也況氓之蚩
蚩者乎山中勝境皆既歷觀渡水攀巖還至前之崖
上將欲鼓餘勇窮船巖頂也導者以天陰近暮苦諫
止之乃就歸路為余輩說其勝概略曰懸崖之一路
曲折而止至山腹絕無樹木矮松偃茂如草危巖歷
人頭而立細沙埋筇一步一端登攀之艱極矣絕頂
有一池周凡半里漾青蓄碧深不可測即古昔火阮
之遺跡云湖邊有一小祠祀船形神俗稱御舟澤權
現相傳反正帝時始建焉北條時賴為僧迴游諸國

嘗一登寶山勢嶄然特立峻極于天可俯瞰陸羽巖
磐數國大瀛萬里一碧如鑑金華山浮其上形如寶
珠其他群山縱走橫逸起伏高低如波濤如奔馬皆
在于履舄下逢隈廣瀨鳴瀨北上等諸大江之所灌
溉林阜墟落點點可辨看天之高氣之迥一呼吸
中雲煙開闔景象幻轉山色水光殆不暇接見真宇
宙間之一大觀也山中又有日月天之二林屏風
飛龍等之數瀑皆勝境也余等唯以能往觀深為憾
焉時天漸暮流雲孕雨滾滾濛濛峰嶂失色一氣混
茫忽然疾風拂衣細雨霏霏乃急行路奇嶮流汗交

背呼吸迫促辛艱殆不可言而余心氣昏昏如醉步
步蹒跚救後遂倒臥于地上衆怪歸索余大聲呼于
耳邊乃覺然未癒衆大驚以雨益暴不可留居強起
余二人把手導者擁後相呼相勵援引下峻而余遂
不能耐然口亦不能言殆絕渡川躋嶺恰如夢中過
行二里入林中之倒導者曰此地距四瀨一里有半
而路最峻隘病羸之人先脚陷壑亦不測矣宜留此
唯無糧食奴與公等一人還至四瀨茅舍作食再來
於此神谷生與導者俱發平戶某留護余夜色昏黑
將初更風雨大到冷濕之氣透骨余乃愕然而覺遽

然而起病頓癒然亦不能歸去聚落葉鑽燧燒之皆
濕不燃寒甚二人踞地相抱取暖時雨漸歇星光數
點明滅如燐夜將半有揮炬大呼自崖上來者即
神谷生與導者也余深謝其勞且告全癒衆大喜導
者又開所齋之食器供余等以飢甚盡啖之皆入林
中伐樹枝山積燃之火勢極盛圍繞取暖余乃謂衆
曰聞登富嶽者至半腹以上或昏矇不辨人事所觀
之物象皆變黃色俗謂之山醉俯行乃癒而其病亦
似異思此日多飲溪水以醫渴或飲毒泉而至此歟
且余好跋涉山川登富嶽者既一回其他振衣之山

無過勞之
如數身若
惟毒泉思
不得速愈

余先用此法無驗

不同

可以十數然未嘗有知今月者一回得此病今日則時之不利無可奈何也惟其為之勞諸子者私心不忍也衆皆困疲臥地上一睡既而天色微白雲氣低垂溪壑曙光一閃金線亂飛世界皆赤衆始有蘇生之思乃又發路之嶮雖來時已觀殆使人戰慄神谷生與導者夜中往來其苦可想也還至四瀧炊飪煮昨所得之葷食了又發遂至定義祠時既午大買酒以犒導者四人環飲皆頽然醉臥已醒乃別導者又發日已暮道路消遠較覺苦艱二更入仙臺各歸其寓實十月二十八日也斯行往還四日初備素志而苦樂倏變感慨

其常游同不禁遂為之記示同游二子併告後游者云

己亥七月

山居恒之評

